季節外れのサンタクロース

さやえんどう塩味

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節外れのサンタクロース

【Ｎコード】

Ｎ５３１９Ｚ

【作者名】

さやえんどう塩味

【あらすじ】

あらすじ。生まれてこの方友達がいないひとりぼっちの主人公、熊谷渉。不良に絡まれていたところを、謎の俺っ娘美少女、菊池麗に助けられる。麗はひとりぼっちのはずの渉と知り合いであるといい、”ゲームの主人公のような青春”を送ってみないかという。後日学校で麗に呼び出されたところには、渉と同じようにひとりぼっちの少女たちがいた。お互いに面識のない中、ひとりぼっち達で秘密結社を結成するという。秘密結社の目的は、麗がひとりぼっちたちの本当の青春を取り戻してやること。そのためには秘密結社に入

り、麗の指示に従ってもらうとのこと。秘密結社に入ると麗からある指令書を受け取り……笑いあり、涙ありの学園青春ストーリー。

pixiv
http://www.pixiv.net/novel/show.php?id=674436

季節外れのサンタクロース　プロローグ　「きっかけ」（前書き）

あらすじ。　夏の女子柔道大会。３年の先輩たちの応援に来ていた菊池　麗。　同級生の話を立ち聞きし、部活をやめる一大決心をする。　退部届けを顧問の先生に提出した後、これからどうするか悩んでいた麗。　麗は自分の寺の墓場の前で、ある不思議な少女に出会う。　笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　プロローグ００１～００２

季節外れのサンタクロース　プロローグ　「きっかけ」

プロローグ００１

記述
夏……。

記述
館内に響く歓声、怒号。

記述
熱気。

記述
激しく闘志がぶつかり合い、次々に雌雄を決していく……。

記述
ここは女子柔道、地方選手権大会会場。

記述
日々の成果を結果として残すべく、歯を食いしばり、全力で相手に立ち向かっていく。

記述
負ければ、夏が終わるのだ。

記述
これは先輩たちにとっては最後の夏だ。

女子柔道部員
「部長……次勝てそうかな？」

記述
……凍らせたペットボトルを片手で取りながら、同級の女子柔道部員が隣に立っていた部員に尋ねる。

隣の部員
「どうだろ、相手結構強そうだけど……。まぁ勝ってほしいよね」

女子柔道部員
「まぁね……あんだけ必死にやってたんだし」

記述
「……」

記述
2年生女子柔道部員達、先輩の試合前に応援席から立ち話をしている。

記述
私たちは部活の先輩たちの最後の大会の応援にきている。

記述
3年の先輩たちはこの大会で最後――この大会が終わればあとは受験等で忙しくなるため、事実上引退試合である。

記述
だから顧問の先生が3年の先輩たちに気を使い、後輩を集めて応援させているのだ。

記述
次戦は部長。人一倍柔道に重きを置いていた人だ。

女子柔道部員
「先輩たち、残り数試合で終わっちゃうね」

隣の部員
「全国行ける実力なんてないもんね、あたしら……。この試合勝てても、次辺りで終わっちゃうんだろうなぁ」

隣の部員
「しっかしまぁ……あんだけ大真面目に練習してたのにさ、部長。現実ってこんなもんだよね。全国なんて無理無理」

女子柔道部員
「あっけないもんだよね……。たぶんあたしらの時もおんなじじゃん？　来年あたしらだよ」

隣の部員
「そりゃー……あー、まぁそうだろうよ」

女子柔道部員
「はぁ……あたしらもたぶん全国いけないっていうのはなんかもうどっかでわかってるし……本当にいいのかなぁ」

隣の部員
「何が？」

女子柔道部員

「あたしの青春。このまま柔道に費やして本当に後悔しないかな、と思ってさ」

隣の部員
「いうね。先輩が今の言葉聞いたら、あんたシバかれるよ」

女子柔道部員
「あはは……用心用心」

隣の部員
「おっ、試合始まった」

記述
部長が相手選手と礼を交わす。

記述
審判が両者の名前を確認し、試合開始を宣言しようとしている……。

女子柔道部員
「……」

隣の部員
「……」

隣の部員
「……ま、わかんなくもないけどさ……あんたの言ってること」

女子柔道部員
「何が？」

隣の部員
「このままじゃ、後悔するかもしんないってこと」

女子柔道部員
「でしょ！？　やっぱ普通そう思ったりするよね」

隣の部員
「……ふーっ、でもさ、結局このままなんだけどねー……」

隣の部員
「青春ってさ。なーんかあると思ってたけど、漫画みたいな特別なことなんて……何もないし」

女子柔道部員
「そうそう、勉強も難しくなって忙しいし、受験で塾もあるから前より全然時間ないし……」

隣の部員
「さらにこうやって部活やってりゃもう何もできないって。……あーあ、こうやって終わっていくんだろうなー、あたしも」

女子柔道部員
「なんかさ、人生で一番大事な時間なのに、めちゃくちゃ無駄にしてるかもしれないって思う」

隣の部員
「……作れば？　彼氏とか」

女子柔道部員
「いる。春からすでに」

隣の部員
「はっや。なら彼氏と仲良くやってりゃいいじゃん」

女子柔道部員
「それがさぁ、なんかもうマンネリ。会ってももう話すことないし、彼氏作っても何すればいいかさっぱりわかんない」

隣の部員
「そっかー、まぁ普通そんなもんだって。普通普通」

女子柔道部員
「普通かー。まぁみんなもそんなもんだよね」

記述
「……」

記述
普通そんなもの。

記述
その女子部員の言葉が私の心の中のどこかで引っかかる。

記述
考えないようにしていた。自分だけだと思っていた。

記述
けれど……。

女子柔道部員

「ねぇ菊池って彼氏とかさ……ってあれ」

隣の部員
「どしたー？」

女子柔道部員
「いや、さっきまでそこに菊池いたよね……？」

隣の部員
「えっ？　さぁ……あ、ほら。決着ついたみたい」

記述
……思えば、多分このときからだったんだろう。

記述
唐突に、何かしなくちゃならないと思い始めたのは……。

記述
――――。

記述
――。

記述
……冬。

記述
冬といっても上着を着なくてもいいというぐらいには暖かい。

記述

寒さもそろそろ終わり頃。

記述
そんな感じの今日、私は、一大決心のために職員室のドアの前に来ていた。

記述
十分に息を整え、コンコンコン、と短くノックする。

記述
「鈴木先生〜！　今いいスか？」

記述
一瞬だけ先生たちが自分の方を向いた。大きな声は持ち前の元気さだ。

記述
職員室の奥側の机に座っていた鈴木先生が、席を立ってこちらに向かってくる。

鈴木先生
「どうした、菊池じゃないか。なんか用か？」

記述
「先生に見てもらいたいものがあるんスよ、これ」

鈴木先生
「ん〜？　なんだ、こりゃ。紙？」

記述

「ラブレターです」

鈴木先生
「……ぶっ！？」

記述
「嘘ですよ。とりあえず読んでください」

鈴木先生
「なんなんだまったく……えーと、なになに……っておい、これ退部届けじゃ……」

記述
「先生、お世話になりました！　先生のこと好きでしたよっ！」

鈴木先生
「ええ！？　おい、菊池……今度春の大会もあるだろうが。なんで今更……3年になって、これからお前らが主役なんだぞ！？」

鈴木先生
「練習だってずっと頑張ってたから……今度の部長、お前にしようと思ってたんだぞ！？」

記述
「……じゃ、確かに渡しましたんで……それじゃーそういうことで！　今までありがとうございましたっ！！」

鈴木先生
「おいちょっとまて！　菊池っ！　菊……ッ！！」

プロローグ００２
記述
「ハァ、ハァ……」
記述
「……」
記述
部活を、辞めた。
記述
１年のときからずっと続けてきた部活を辞めた。
記述
意味も無く走って家に帰る。
記述
ダッダッダッ……。
記述
ダッダッダッダッ……。
記述
……。
記述
古びれた街角の寺。
記述
階段をくぐり、参拝客用の通路の下を通り抜け……関係者以外立ち

入り禁止の張り紙がしてある扉を開ける。

記述
ガラガラガラッ……バタン……。

記述
「……」

記述
「……た、ただいま……」

記述
鞄を玄関前にポイっと放り、乱暴に靴を脱いで上がる。

記述
物が散らかったダイニング。テーブルの上に朝食の皿が残されていてだらしない。

記述
食器を流しに持っていくため、両手で運びながら。制服のブレザーをかけるハンガーを探す。

記述
「えーっと、あ、あったあった」

記述
ぱくっと木製の箸を口に咥え、空いた左手でハンガーを取る。

記述
食器を流しに置いてブレザーを脱ぐ。セーターも脱ぐと静電気がバ

チバチいった。

記述
「あう、ひょーやっは（そーだった）」

記述
帰ったらしなければならないこと。

記述
咥えていた箸を流しに置き、トコトコと隣の仏間の部屋へ向かう。

記述
ススス……パタン。

記述
仏間には冷たい空気が充満していて、扉を開けたと同時にひんやりした風が身体をそっと撫でる。

記述
窓辺から入ってくる夕方の日差しのおかげで電気をつけるほど暗くはなく、仏間の柔らかな畳に自分の影がぼんやりと滲む。

記述
仏壇の扉を開き、両足を折って座布団の上に正座する。

記述
チーン……。

記述
ちょこんと置いてある鈴（りん）の縁を、隣にあった鈴棒で軽く叩く。

記述
部屋に響く甲高い鈴の音は、冷たい空気を更に清めるように、耳に心地よく響いた。

記述
仏壇に向かって手を合わせ、そっと目を閉じる。

記述
「……じいちゃん、ただいま。今帰ったよ」

記述
仏壇に飾られている遺影、祖父の写真に手を合わせる。

記述
しばらく無言で手を合わせたあと、ゆっくり解いて足を崩した。

記述
「……じいちゃん、今日な……。俺、じいちゃんに言わなきゃいけないことがあるんだわ」

記述
ひと呼吸おき、吐き出すように言葉を続けた。

記述
「……今日、顧問の鈴木先生に、退部届け出してきたっ！」

記述
言い切ったという表情で、ふいーと表情を崩す。そのあとあ……となって表情を元に戻す。

記述
「やっぱ……怒った？　やー、そりゃ怒るよなー。じいちゃん、ずっと柔道だけは続けろっていいよったもん」

記述
「俺もな、結構悩んだんだけど……やっぱ自分に嘘つけないって思ってさ」

記述
「あー！　あー！　で、でもなっ！？　学校卒業したらちゃんと寺継ぐし、そしたら色々ちゃんとやるから」

記述
「だから、これだけは……ごめんっ！！」

記述
ガバッ！

記述
必死に仏壇に向かって頭を下げる。

記述
……もう今年で終わっちゃうから、今年は何かしたいんだ！

記述
その一心でじいちゃんの仏壇に頭を下げる。

記述
「……っ！！」

記述
「……っ」

記述
「……」

記述
何かって……なんだ？

記述
ふと思って頭を上げてみる。

記述
「何するとか、どうするとか、何もまだ決めてないうちに部活辞めちゃった……」

記述
「って、そうだよっ！　一番大事なのそこじゃんっ！？　俺、部活辞めて何すればいいか全然わかんないし、何も決めてないよ！」

記述
「あああ、あ、あああぁぁ……」

記述
バタッ……！

記述
畳に仰向けに倒れる。

記述
目に入るのは木造のしなやかな天井。
記述
「……」
記述
「……あああ」
記述
「あああああ」
記述
「ああああー！」
記述
「わーっ！　わーっ！」
記述
「わあああぁ……」
記述
「……」
記述
何じゃそりゃ……。
記述
腕を目の上にのせ、深くため息を吐いた。

記述
はぁ……。

記述
やっべー、どうしよ……。勢いだけでとんでもないことしちゃったよ……。

記述
あーあ、俺ってば昔からこれだからなーっ！　後先考えずに行動しちまって、それからどうするかまったく考えてなかった！

記述
「……」

記述
鳥がさえずる声が聞こえる。車が道路を走って、通り抜けていった。

記述
静かだ……。とっても……。

記述
「……」

記述
「……まぁ」

記述
「いっかぁ……」

記述

そうだよな、もう退部届けだしちゃったんだ。何するかは後で考えよう。

記述
「んーーっ！！　よいしょーっ！！」

記述
足を振り上げて勢い良く立ち上がる。

記述
そうだよ。もうどうしようもない。何をするかは境内を掃除しながら考えよう。晩飯も用意しなきゃだし。

記述
そうと決まれば話は早い。制服から装束に着替え、掃除の準備を始める。

記述
……冬に装束ってやっぱり寒い。

記述
……パキ。

記述
……。

記述
……？

記述

窓が鳴った、ような気がした。

記述
……。

記述
……。

記述
……きっと気のせいだろう……早々に着替えて草履を履き、落ちた木の葉を掃除するために墓の方へと行ってみる。

記述
ビュオオオオオ！

記述
外に出ると強く冷たい風が吹く。

記述
「うおーっ、さっぶ！　やっぱまだ冬だぁ……」

記述
身体を震わせつつ掃除用具いれから道具を取り出す。

記述
さて、掃除だ掃除。準備準備……。

記述
「あれ……」

記述
自分の立っている所から、ちょっと離れた前方にあまり見かけない女の子が立っていることに気づいた。

記述
誰かの家の墓の前、自分と同じ歳……かそれより下ぐらいの女の子。

記述
なんだか虚ろな目で墓石をじいっと凝視している。

記述
なんだろう、見たことない子だけど……。

記述
手にとっていた竹箒を壁に立てかけ、女の子の様子を伺ってみる。

記述
……肌がすごく白いな。あんまり日に当たってないような、なんだか弱々しい印象だ。

記述
吹けば飛んで消えてしまうというか……どこか危うげで切ない……そんな印象。

記述
そういえば服もこの寒い日にパジャマみたいな寒そうな格好をしている。まるでベッドから起きてそのままの格好で外に出てきたような感じだ。

記述

あれこれ考えているうちに、ふっ……と少女が動いた。

記述
虚ろなままの目で、ズボンのポケットに手を突っ込み、なにやら黒い棒みたいなものを取り出す。

記述
蓋を取ってそのまましゃがんで、その棒を墓に向けて……。

記述
……あ、何してるのか分かった。

記述
「……おういっ！！　までやコラアアア！！」

記述
女の子の方へ全速力で走っていく。

女の子
「あ……」

記述
「なに墓に落書きしてんだコラァァッ！！」

女の子
「……魔王だ」

記述
女の子が自分の方をむいて立ち上がる。

記述
「……は？　ま、魔王？」

記述
今言い放った彼女の言葉が理解できずに、ぶっきらぼうに聞き返した。

女の子
「うん、魔王」

記述
「何だよ魔王って……え、もしかして俺のこと？」

記述
コクコク。

記述
「……いやいや、俺は魔王と違う……っていうか女で魔王はないだろ……」

女の子
「魔王……」

記述
「魔王違う！　……失礼なやつだなぁ、こんな美少女捕まえて。いいかぁ～、俺の名前は魔王じゃなくて菊池……」

女の子
「麗でしょ」

記述
「……え？　……あ、そ……そうだよっ！　俺には菊池麗っていう立派な名前があるんだ！」

女の子
「うん、菊池麗……姉ちゃん」

記述
「おう、そうだぞ。……ん、でもなんで俺の名前知って……」

記述
あぁ表札でも見たのか……。

女の子
「麗姉ちゃんなら……やっぱ、魔王じゃん？」

記述
「……はぁ？　まぁいいや、とりあえずそのペンをかせっ！」

記述
強引に女の子の手からマジックペンを奪い取った。

女の子
「ああん……乱暴」

記述
「気っ色悪ぃ声だすなっ！　……って、ああっ！！　これ油性ペンじゃないかーっ！！」

女の子

「それしか持ってなくて」

記述

「まったくこいつ……あー落とすの大変だよこれ、もぉ～」

記述

「おいこのやろう。いいか、墓石っていうのは神霊の依り代で、マジックで落書きなんてしていいものじゃないんだぞ……」

記述

「わかったらもう二度と墓に落書きなんて罰当たりな真似は……」

記述

マジックで落書きされたそれを見た。

記述

墓石の側面にはその家族の名前が彫られていて、先祖の名前が横に並んでいる。

記述

その名前が並んでいる最後のところに、小さく名前が書き足されていた。

記述

「……これ、お前の名前か？」

女の子

「うん」

記述

「お前、この墓の家の子？」

女の子
「ううん、違う。苗字が一緒だったから」

記述
「……」

記述
なんで、墓に自分の名前なんか……。

女の子
「ねえ、お姉ちゃん――」

女の子
「まだ――――」

女の子
「まだ、柔道やってる？」

記述
えっ？

季節外れのサンタクロース　プロローグ　「きっかけ」（後書き）

はじめまして、さやえんどう塩味と申します。
自身の稚拙な作品を最後まで読んでいただき、まことにありがとうございました。
もしお気に召されましたらこれからもどうぞ末永くお付き合いください。
これは自作のノベルゲーム用のシナリオです。ギャルゲとしてご覧ください。お好きなギャルゲ、エロゲの音楽モードを開き、適当なＢＧＭをかけながら読むと効果的です。さらにお手元にコーヒーやポテトチップスなどを置いて読むといろいろと捗ります。
作中には可愛い女の子、選択肢、分岐が現れます。お好きなようにお読みください。お好きな女の子はお嫁にもらってやってください。

注意。
テキスト中の「女子柔道部員」「女の子」などは実際にメッセージウィンドウの名前欄に表示される名前を想定しております。「記述」と書いた場合には名前欄のところには”何も表示されていない”という様に脳内補間してください。（ゲームの制作に使用しているソフトの都合です）

この作品は当方持てる限りの力を入れて書いております。プロットは九割以上既に完成しており、プロット段階では自身の最高傑作になるだろうと自負しております。
最後まで読んでいただけましたら絶対に面白いと言っていただけることを保証いたします。（うわぁ、言っちゃった）どうか最後まで見捨てないでください。
ご感想、評価等は作者の執筆のモチベーションの向上につながります。読んでいてこれはとお思いになられましたなら、どうぞお気軽

にご感想をお寄せください。
お礼としてご感想をいただけました方全員に、感想のお返事と、その方の作品の感想を送らせていただきます。
ここまで読んでいただきありがとうございました。それでは続きをお楽しみください。

季節外れのサンタクロース　第一章００１　「食堂からの風景」（前書き）

あらすじ。　主人公、熊谷　渉は白秋西学園の2年生。生まれてこの方友達がいたことがなく、いつも一人ぼっちで学園生活を過ごしている。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００１

季節外れのサンタクロース　第一章００１　「食堂からの風景」

第一章００１
記述
人。

記述
人、人。

記述
人、人、人。

記述
大勢の人々が食券を手に、我先にと配膳所へなだれ込んでいる。

記述
あちらを見れば金髪のチャラい男子生徒、こちらを見れば真面目そうな小柄の女子生徒。

記述
腹をすかした生徒に年齢性別などは関係ない。

記述
腹が減れば誰だって飯を食う。

記述
そう、それは大自然の偉大な摂理なのだ。

記述

お腹をぺこぺこにすかせた大量の生徒が、長く列をなして大蛇のようにうごめいている。

記述
大蛇の中腹そのあたり……自分の順番が来るのをぼーっとして待っている生徒たち……。

記述
友達と悪ふざけをしながら、オレンジ色のトレーを持って食堂の壁にもたれかかってる生徒たち……。

記述
そんな様子をぼーっとしながらオレは見ている。

記述
ひまつぶしの観察。

記述
自分と全く関係がない他人でも、ただ見るだけで案外楽しい。

記述
たとえばこの食堂。

男子生徒
「おいっ！　俺の方が先だったろ！？　順番守れよ！」

男子生徒
「おばちゃーん！　天ぷらうどん、大盛りね～」

女子生徒

「えぇ〜！？　もうＡランチ売り切れなの〜！？」

記述
ここに並んでいる生徒は、友達同士で騒いでいるやつもいれば、ひとりで静かに本を読んで待ってるやつもいる。多種多様、十人十色だ。

記述
以下、何の変哲もない昼休みの食堂の一般風景の例。

記述
１）毎日毎日、食堂に来て並んでは列の長さに文句をいい、メニューの売り切れに落胆する。

記述
２）食い飽きたメニューから昼飯を選べば、あとはいつものやつと一緒に固まって食う。

記述
３）もう何回も同じことをしているはずなのに、食堂が生徒であふれない日はない。

記述
毎日同じことを繰り返しているこんな日常から、普通と違う所を見つけることは面白い。

記述
おもむろに制服のブレザーの袖を右手で横にずらして腕時計を確認。

記述

８分。

記述
４限目が終わってから経過したその時間、８分だ。

記述
この時期の食堂は『午前の授業が終わって５分以内に食堂の配膳所に並ばないといけない』という生徒の間だけの共通の認識が存在する。

記述
８分より遅く来てしまうと、と自分の飯を受け取るまでに少なくとも３０分は長蛇の列に並ぶ羽目になってしまう。

記述
時間が経てば食堂で昼食を取ろうとする生徒が殺到するからだ。

記述
……というのもあるが、それだけなら３０分も並んだりはしない。

記述
本当の理由は、今が４月だってことと、この食堂が白秋西学園の食堂だってこと。この二つだ。

記述
白秋西学園にある食堂……通称「白秋食堂」は、実は地元じゃかなり有名な食堂なのだ。

記述
普通なら近所のおばさんとかが、

記述
『あの学園は吹奏楽部がすごいねぇ』

記述
とか

記述
『英語に力入れてるわよねぇ』

記述
なんていうもんだ。

記述
はい、白秋西の場合。

記述
『白秋西は食堂がすごいわよねぇ』

記述
とか

記述
『白秋西は食堂だけすごいわよねぇ』

記述
とか

記述
『白秋西は食堂以外すごくないわよねぇ』

記述
なんていわれるんだ。もうその時点ですごいから驚きだ。

記述
白秋西学園ってのはそんだけおかしい所なんだって思っていい。それは正解。

記述
で、だからこそ、この時期は新しく入学してきた1年生が物珍しさで白秋食堂に押し寄せてくるというわけだ。

記述
上級生なら経験があるから早くから並ばないといけないってわかってるが、1年生たちは何も知らないで列に並ぶのだ。

記述
長蛇の列に並んだ末に昼休みが終わって飯が食べられなくなる1年生の様子は白秋学園の中での隠れた春の風物詩だ。

記述
去年のオレも列に並んでしまって、泣きながら教室に戻ったっけ……。

記述
知らないで並んでいる新入生は去年のオレと同じ洗礼を受けるのだろうか……。

記述
……。

記述
……。

記述
ま、だからなんだ、そんなことを考えたところで意味などない。

記述
そもそもどこぞの設定の紹介みたいな独り言をしゃべっているのは、全て俺がたいくつしているからだ。

記述
【たいくつ】：たいくつとは何もすることが無く、暇を持て余している状態。体育館シューズの別名。長座体前屈の略でもある。

記述
みてみろよ、オレのテーブルには誰もいない。

記述
この４人座り用のテーブルに座っているのはただひとり、オレだけだ。

記述
別に、あとから来るわけでもない。

記述
連れがいるわけでもない。

記述
食堂で一人飯を食う様は、正直言って周りの視線が痛い。

幼女
「ママーあのひとだけひとりでご飯食べてるよ～」

記述
な～んて指差す幼女の声が聞こえてきそうだ。

記述
……そうさ。オレは友達がいないひとりぼっちの2年生だ。

記述
読者の皆さんはそろそろこういう風に言いたいんだろう。

読者の皆さんその1
「おいおい、いつになったらかわいい女の子の絵が出て来るんだよ」

読者の皆さんその2
「ずっと主人公がしゃべってて画面が微動だにしないよ～」

記述
言いたいことは分かる。だがちょっと待って欲しい。

記述
オレだってそうさ。話は進めたいさ。かわいい女の子といっぱいいっぱいお話したい。

記述
話を進めようにも誰も絡んでこないんだ。内心次の展開どうしようって焦ってる。

記述
主人公っていうならさ、普通はいつも朝起こしてくれる幼馴染とか、いつも一緒にバカやってる悪友ってもんが必ずいるもんだろ。

記述
まぁ俺にはいないわけだが。

記述
そう考えると、オレは主人公には一番向いていないんだ。

記述
でも実際、みんなもそんなもんじゃないか？

記述
幼馴染がいたとしてもさ、現実じゃ朝起こしてなんかこないだろ。

記述
現実に起きないことが起きるからゲームなんだってな。

記述
……そうさ、中学校も。小学校も。幼稚園さえも。

記述
いつもひとりであそび、ひとりで飯を食べ、健やかに成長した。

記述
それがオレ、熊谷　渉という人間だ。

記述
……どれだけかわいそうな子供なんだろうな、オレ……。

記述
……間がもたないのでまた食堂の風景を観察に戻ることにする。とりあえずオレの普段の生活はこんな感じだ。

女子生徒
「みんなー、ここの机に座ろうよー」

女子生徒
「おなかもうぺこぺこー」

女子生徒
「ちょっとあんた、もう少し横詰めてくれない？」

女子生徒
「全員そろった？」

女子生徒
「うい、そろったよ。あたし水取ってくるよ」

女子生徒
「みんなで取ってこようよ」

女子生徒
「はぁ？　やだよめんどくせー、お前いけ」

女子生徒
「しょーがないなー」

記述

女子生徒たち6人がテーブルを囲んで仲良く昼食をとっている。

記述
あーあ、オレと違ってひとりぼっちになってない連中って人生楽しいのかなぁ……。

記述
弁当の中身、交換したりとかすんのかなぁ……。

記述
別段よく見る光景だけどさ、男子生徒と違って女子生徒は群れることに何か別の約束事が決まっているみたいだ。

記述
あっちの奥テーブルの女子の集団なんか、8人全員同じカレーの並盛を頼んでいる。

記述
予め、みんな同じにしようね～って決めてたんだろうな。

記述
男子の場合一緒に飯を食うことはあっても、メニューまで一緒にしようなんていうことはないよなぁ？

記述
8人もいるなら一人ぐらいうどんを食いたいやつがいてもいいはずだ。

記述
そういう意味じゃ、男子より女子の方が生きづらいのかも。

記述
逆に言えば女子が何かの間違いでひとりぼっちになっちまうと……。

記述
……ご愁傷さまです。

記述
お……？

女子生徒
「あ、あれ？」

記述
奥テーブルの女子の集団の中に、うどんをのっけたトレーを抱えた1人の女子生徒が、小走りでその集団の方に向かって行っていく。

記述
マジでいたよ……うどん。

うどんの女子生徒
「ご、ごめんなさい……お、遅くなりました……」

女子生徒
「瀬川～！　あんたトロ過ぎ～、みんなもう食うとこだったよ」

女子生徒
「は？　なんでお前うどん頼んでんの？」

うどんの女子生徒

「え、だ、だって……朝、諒子さんが今日はうどんだって……」

女子生徒
「は？　言ってねぇよ」

女子生徒
「涼子、んなこと言った？」

女子生徒
「あたしはうどんなんかあり得ねぇって言っただけだよ」

うどんの女子生徒
「そんな……」

女子生徒
「こいつ、涼子のせいにすんのかよ」

うどんの女子高生
「いえ……」

別の女子生徒
「は～い水でーす」

女子生徒
「ばっか、水がトレーにこぼれてんじゃん！」

女子生徒
「9個も水乗せて歩けるかっつーの、あぁ、コップ足りなかったから1人湯呑みね」

女子生徒
「おう、サンキュー」

女子生徒
「湯呑みなんかやなこったー！　お先にコップいただきっ」

女子生徒
「ばか、急に取るなって！　こぼれるだろー」

記述
飲み物の奪い合い、水の入ったコップが次々に取られていく。

うどんの女子生徒
「えっと私も……」

うどんの女子生徒
「よいしょ……」

記述
うどんの女子生徒が手にとったのは、コップの方だった。

女子生徒
「……は？」

うどんの女子生徒
「あ……いえ……」

記述
手にとったコップを元に戻し湯呑みの水に取り替える。

女子生徒
「瀬川、わるいねー」

女子生徒
「ありがとー、瀬川」

うどんの女子生徒
「あ……はい」

女子生徒
「ま、瀬川になるよねー」

女子生徒
「正直分かってたわー。瀬川が湯呑みになるの」

うどんの女子生徒
「……」

記述
……。

記述
……。

記述
あいつ……グループの中でいじめられてるのか。

記述
コップが置いてあるところをちらっと見てみる。

記述
……やっぱりだ、足りないなんて嘘じゃないか。

記述
こいつら、わざとあいつに湯呑みで飲むように仕向けたんだ。

記述
よし……。

記述
オレは颯爽と席を立ち、その女子グループのところに向かっていった。

渉
「おい」

女子生徒
「あ……？　何だお前？」

記述
オレはうどんの子をいじめていた女子生徒の横っ面をシバいた。

記述
バシッ！

女子生徒
「……ッ！？」

女子生徒
「……な……」

渉
「自分の友達、いじめてんじゃねーよ」

女子生徒
「あ……」

記述
「おい、いくぞ。うどん」

うどんの女子生徒
「え、あ……はいっ！」

記述
……。

記述
……。

記述
……。

記述
とかできたらいいんだけどね。

女子生徒
「そのうどん結構うまそうじゃん。一口頂戴」

うどんの女子生徒
「あ、はい。いいですよ」

記述

……見たところそんなひどいわけでもないし……。自分でどうにかするだろ。

記述

……。

記述

午後からの授業……いやだなぁ。

季節外れのサンタクロース　第一章００２　「オレの天使」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われた。　笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００２

季節外れのサンタクロース　第一章００２　「オレの天使」

第一章００２

記述
桜が咲いたころに……入学式やクラス替えが終わった。今日からとうとう授業だ。

記述
今日からが本当に新学期というわけだ。

記述
まだ寒いながらも日差しは暖かみを帯びてきたし、外の桜も大体は咲き終わって、これから後は散るだけだ。

記述
なんだか感慨深いものがある。

記述
だが新しいクラスになった喜びもつかの間……。

記述
うちの学園では2年から3年は持ちあがりになっていて、クラス替えは今年が最後だ。

記述
知り合いとクラスが離れたやつは、一人にならないように無理に他人に話しかけたり集まったりしているが……オレはどうするべきか……。

記述
クラス替えを機に何か変わって欲しいな……この何も変わり映えのない、ぼーっと流れていく毎日が。

記述
……いっそ変えてみてやろうか。オレから。

記述
午前中は式だなんだでめでたいことに潰れた。

記述
晴れある一回目の授業はホームルームだ。無難っちゃ無難っていうことで自己紹介を一人づつ言うことになった。

記述
今担任の先生が出席番号順に当ててていって、順番に一言ずつ自己紹介をしている。

記述
ここでいっちょ面白いことをすれば、あっという間に人気ものだ。

先生
「……えーじゃあ次」

記述
……よし、オレだ。

記述
自分の筆箱から取り出したのは鉛筆二本。

記述
オレはそれを、両方の鼻の穴にゆっくりと刺し入れた。

記述
ぽんぽんと叩いて奥まで入ったのを確認すると、ゆっくりと椅子を引いて席を立つ。

渉
「元1年B組、熊谷渉です」（鼻声）

渉
「帰宅部です。好きなものはアニメとゲーム」

渉
「友達は、いません」

渉
「みんな仲良くしてください」

記述
……。

記述
……。

記述
……。

記述

反応はなかった。

記述
吹き出す奴も、ツッコミを入れる奴もいなかった。

記述
誰もオレのことを見ていない。早く終わって欲しいと言わんばかりに目線を下にして俯いている。

渉
「……」

渉
「……」

渉
「コグスワース……」

記述
ダメ押しにつぶやいてみた。

記述
……。

記述
……ダメだ、みんな無反応だ。美女と野獣見てないのかお前ら。

記述
オレは全てをあきらめ、力なく席に座った。

――

記述
……。

記述
……。

記述
結構寝たなぁ……。

記述
授業が終わった途端に騒がしくなる教室。

記述
エロゲーだったらここで可愛い幼なじみとか仲のいい男友達が話しかけてくるのが一般的といったとこか。

記述
だが前述した通り、オレにはそんな奴ら1人もいないんだなこれが。

記述
休憩時間中をどうやり過ごすか考えるのは本当に苦痛だ。

生徒
「ねぇねぇ、今日の集まり、どこら辺にしようか」

生徒
「駅前のボーリング場とかどうかな、カラオケだと嫌がる人もいるし」

生徒
「あっ、そうだねーそこらへんも考えて決めないと……」

記述
なんか楽しそうだなぁ……いいなぁ……。

記述
俺も行きたいよ飲み会。

女子生徒
「あっ、熊谷君」

記述
突然女子から声を掛けられた。断っておくが別に知り合いではない。

渉
「ん、何？」

記述
オレは刺さったままの鉛筆を鼻から抜いた。

女子生徒
「まだ熊谷君には知らせてなかったから、言っとこうと思って」

女子生徒
「えっとね、せっかく一緒になったわけだし、卒業までずっとこのクラス同じだから、みんなで親睦会やろうって話があるんだよ」

渉

「いいね。親睦会」

女子生徒
「ちょっと前から話は回ってたんだけど、熊谷君と連絡取れる人いなかったから伝えるの遅れちゃって、ごめんね」

渉
「いや、いいよいいよ。オレもそんなに友達いなかったから」

女子生徒
「そ、そうなんだ……。それでね、実はそのパーティやるの、今日なんだよ」

女子生徒
「ホント急な話で申し訳ないんだけど、熊谷君、来れる……？」

渉
「マジで？」

女子生徒
「うん、マジで」

渉
「オレなんかが行っていいの？」

女子生徒
「もちろんだよ。クラスメイトじゃん」

記述
すげぇ、オレ……生まれて初めてクラス会誘われた……。

渉
「行く！　行かせていただきます！」
女子生徒
「わかった。熊谷君参加だね。ちゃんと来てね！」
渉
「もちろん」
女子生徒
「それじゃあ私が幹事だから、何かあったら私に連絡してね。アドレスと番号教えるから！」
渉
「よろしく頼むよ」
記述
赤外線でアドレスを交換しようとする。
記述
誰かと携帯を向け合うことは正直ちょっと照れ臭い。
記述
だが交換し終わらないうちに、午後の最後の授業を始めるべく先生が教室に入ってくる。
先生
「おらー、６時間目始めるぞーちゃっちゃと席に座れ～」
女子生徒

「あ～、先生きちゃった……！　熊谷君、アドレスはまた後で！」

渉
「おう！」

記述
幹事とかいう子はそのまま走り去ってしまった。

記述
オレがクラス会に誘われるなんて夢でも見てるんじゃないだろうか。

記述
ちょっとほっぺたを自分でつねってみる。

記述
……あれ、痛くないかも？

記述
いやいやそんなことない。うん、痛い。確かに痛い。

記述
夢じゃない。

記述
すごいな。オレにもとうとう春が舞い降りたか……。

記述
いやいや……人生には3回はモテる時期があるっていうしな！

記述

フフン、まだ3回とも残してるからな……。

記述
とりあえずさっきの女子、結構可愛かったなぁ……。

記述
もしかしたらこのクラス会を機に仲良くなってつきあったりなんかしちゃったり……。

記述
よし、オレの天使は君に決めた……。

記述
きっとオレは、あの娘とそれはそれはロマンチックな高校生活を送るに違いない。

記述
まだ午後の6限目だ。

記述
これが終われば親睦会……。

記述
残りの授業、かったりぃなぁ……。

記述
よし、早く終わらせるためにこの時間も寝るぞ！

記述
羊が1匹……2匹……。

記述

……。

記述

……ぐー。

記述

……。

――

季節外れのサンタクロース　第一章００３　「願えば幼女」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われ、ワクワクしながら授業を寝て過ごす。　すると……。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。

第一章００３

季節外れのサンタクロース　第一章００３　「願えば幼女」

第一章００３

記述
燃えるように赤く色づいた陽の光が暖かく窓辺を照らす。

記述
廊下では腹に響くようなキューバの低音と、グラウンドで汗を流す生徒の声が反響する。
記述
教室に残っている生徒は誰もいない。

記述
寝ぼけまなこを擦りながらぼーっとしてみる。

記述
どうやら誰も起こしてくれなかったようだ。

記述
あ……親睦会、どこであるか分かんないや……。

記述
あの幹事の娘の連絡先聞けてないし、他の誰の連絡先もわからん……。

記述
これじゃ、どうしたって行けないじゃないか。

記述
……。

記述
……。

記述
もう、あきらめて帰ろう……。

記述
教室にいてもしょうがないし、オレにはさっさと学校から帰るしか選択肢がなかった。

記述
ため息混じりに下駄箱に向かう。

記述
一番左端の右から3番、下から5番目がオレの靴箱だ。

記述
適当にぶらついて時間でもつぶすか……。

――

記述
学校が終わった後の帰り道。

記述
何の気もなしに、のろのろとした足取りで商店街を歩く。

記述
明るく暖かな太陽の光が傾き、地平線の向こうが夕日で少し眩しい。

記述
この辺りにある店はだいたい行きつくしちゃったなぁ。

記述
目につくのはコンビニやら雑貨などの店。わき道にファーストフードの飲食店やファッション服の店。

記述
服なんか全然興味ないって……。誰に見せるわけでもないのに……。

記述
道に落ちていた空き缶を蹴り飛ばす。

記述
……この状況を一変する何かがあればなぁ。

記述
美少女が空から降ってくるとか。

記述
異世界に飛ばされるとか。

記述
なんでもいい、このつまらない毎日から解放されるならオレは喜んでそれを受け入れよう。

記述

そうだ、念じれば通ず。願えば幼女だ。

記述
目をつむるとそこには真正面から突っ走ってくる幼女がいて。

記述
必然のようにぶつかり転倒、目の前にはうぅ～と泣くつるぺた幼女……。

記述
こういうのは気持ちが大事だ。本気で念じれば幼女の一人や二人ぶつかってくるはずだ

渉
「……」

渉
「……こいっ」

渉
「幼女……こいっ！」

記述
幼女オオオオオオォォォォッッ！！

記述
ドンッ。

記述
前方から唐突に何かがぶつかってきた振動。

記述
おっ！？　これはマジできたか？

記述
目を開けたら、そこにはきっと……。

不良風の男
「いててて……」

不良風の男2
「だ、大丈夫ですかアニキ！？」

不良風の男2
「おいっ！　てめぇっ！　どこに目ぇつけて歩いてやがる！」

記述
……そんな都合のいい話はなかった。

記述
目を開けてみればつるぺたな幼女などおらず、よりにもよって金髪の怖そうな不良たちにいちゃもんをつけられていた。

不良風の男
「いてて……右腕が折れた……もうダメだ……」

不良風の男2
「そんなっ！　アニキッ！　しっかりしてくだせぇ」

不良風の男2

「おいてめぇ、アニキになんてことしやがる！？　ただで済むと思うなよ！？」

不良風の男
「これは病院代を払ってもらわんとなぁ」

渉
「ちょっと当たっただけで骨が折れるわけないだろう……？」

不良風の男
「俺は骨粗鬆症ですぐ骨が折れるんだよ！　牛乳飲んでねぇからなぁ～！」

不良風の男２
「おい、黙って病院代払えばいいっていってんだよ！　素直にアニキに従わねぇと、てめぇの骨も折れちまうよ？」

記述
なんて古典的なカツアゲだ……。

記述
この平成の世にもまだこんな古風な不良がいたんだなぁ……。

記述
まったく今日は同級生に置いていかれるわ……不良に絡まれるわ……本当についてない。

記述
平和主義のオレはおとなしく金を払う事にしよう……なんかもう今日めんどくさいし。

記述
病院代は3割負担でいいんだろうか……これで保険にはいってないとか言われたら相当な出費に……。

記述
えっと財布の中には……10円と、1、2、3、4、……。

記述
……。

記述
……14円。

記述
オレ、終わった……。

記述
残念ながらこれ以外にお金はまったく持ち合わせてない。財布二つ持っておけばよかったな。

記述
しょうがないからこの14円で病院に行ってもらおう……。

記述
財布を逆さにして14円を手の上に落とし、そのまま不良風の男に手を差し出した。

渉
「どうぞ」

不良風の男２
「……あ？　なんだこりゃ？」

渉
「病院代です。これで治療してください」

不良風の男２
「馬鹿野郎！　たった１４円じゃ湿布ももらえねぇじゃねえかよ！」

不良の男
「てめぇ、なめてんのかコラ。あ！？」

記述
骨が折れたはずの右腕を振り上げ、俺を殴ろうと威嚇する。なんだ全然元気じゃないか。

記述
たぶんこの付きまとってる金魚のフンはそんなに強くないが、アニキって呼ばれてるこいつ、意外と結構強そうだ。

記述
さて、どうしたものか……。

？？？
「おんどらぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

不良風の男
「あぁ！？」

記述
謎の掛け声とともに突然、ふわっと宙に舞う不良たち。

記述
……な、なんだ！？　何が起こったんだ！？

不良風の男2
「う、うわあああああああああ！？」

不良風の男
「だ、誰だてめ……！？」

不良風の男
「ぎゃあああああッ！」

？？？
「フン……なんだなんだ、男のくせに手ごたえないぞ！！」

記述
一瞬何が起こったのかはわからなかった……。

記述
気がつくとオレに襲いかかってきてた不良はぶっ飛ばされていて、
もう一人の方も空中高く飛び、地面に落っこちていた。

記述
目が覚めるような美人がそこにいた。

記述
背は大きく体つきはしなやかで、鋭く光る眼差し。睨みつけられる
とそれだけで震え上がってしまいそうな眼だ。

記述
短めの制服のスカートが風になびいている。

記述
大人びているから多分オレより年上って感じだろう。

記述
地に這いつくばっている不良たちに片足を乗せ、蔑むような目で見下ろす。

記述
え、てかこの人が今こいつらをぶっ飛ばしたの？

謎の女の人
「お前たち……最近ここらで古典的なかつあげしてるって噂の不良たちだなっ！？」

謎の女の人
「俺の知り合いに手ぇ出した罪、軽くはないぜ……悪いが、死んでもらう！」

記述
ズシャア……ッ！！

記述
振り上げた足が唸りをあげる。

記述
不良の学ランを掴み、一瞬のうちに一本背負いをかける。

不良封の男
「う、うわあああああっ！？」

記述
ドサァッ！！

記述
かなりの高さから振り投げられ地面についた時の音が痛い。

不良風の男
「くっ、ぐ……グウゥッ！！」

不良風の男2
「やべーよアニキ、ずらかりやしょう！」

不良風の男
「しょ、しょうがねー」

記述
不良たちは一目散に逃げ出していった。

謎の女の人
「よわっちぃやつらー、あ、素人に技かけたっていうのは内緒にしといてくれよな？」

渉
「あ、あの」

謎の女の人
「ん」

渉
「助けてくれてありがとうございます」
謎の女の人
「なぁに、これぐらい。知り合いなら当然だ。そうだろ？」
記述
いや、初めてお会いしましたけど。
記述
まぁこんな美人な人の知り合いだったらどんなにうれしいか。
謎の女の人
「みたとこ、どこも怪我してないな……無事で何よりだ」
渉
「えぇ。なんともないです」
謎の女の人
「だが、俺の方が大丈夫じゃね……え……」
記述
いきなり倒れこむ謎の女の人。
渉
「え、えええ！？　ちょっ、　大丈夫ですか！？」
記述
さっきまで不良を圧倒的にぶっ飛ばしていた様に見えたけど、もし

やどっか怪我とかしたのか……！？

記述
注意して抱きかかえてみる……くそっ、案の定顔色が悪いぞ……っ！

謎の女の人
「……ご……」

記述
な、何だ……？

謎の女の人
「ご……は……ん……」

季節外れのサンタクロース　第一章００４　「薄情なメイドさん」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、場所を教えてもらえず、クラス会に行けない渉。連絡先もわからない。放心しながらぶらぶら歩いていると不良に絡まれて踏んだり蹴ったり。そこに謎の女の子が不良をぶっとばした。自分のことを知り合いだというが完全に初対面。なんかお腹がすいているようだ。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００４

第一章００４

記述
ごはん……。

記述
……ごはん？　ああ、メシか。え、お腹すいて倒れたの！？

記述
わ、わけわかんねぇ……でもともかく何かはやく食べさせないと……。

記述
だ、だが今の持っている金は１４円だけだし……何も食べるもん持ってないぞ。

記述
何が買える……？　うまい棒しか買えないじゃないか……っ！

記述
いや、うまい棒でもこの際……いやいや、ここで俺が取るべき選択は……。

記述
あ、そうだ！　オレがいつも通ってる喫茶店なら顔見知りだし大丈夫だ！

記述
それに人が倒れたっていう緊急事態だし、ツケで何かは食わせてくれるはずだろう。

渉
「よし……そうと決まればッ！」

記述
オレはその助けてくれた謎の女の人を背中におんぶして、喫茶店へと運んで行った。

――

記述
……。

記述
……。

謎の女の人
「……あ～生き返ったぁ～！！　腹減りすぎてマジ死ぬかと思った～！！！」

渉
「いきなり倒れちゃった時はオレも死ぬほどびっくりしましたよ」

謎の女の人
「いやぁ悪いねぇ。こんなに御馳走してもらって」

渉

「いえ、不良にからまれてるの助けてもらったし、このぐらいはしないと」

記述
とりあえずメイド喫茶に連れてきたけど……てかどうしよう。どう見ても全然知らない人なんだよなぁ。

メイドさん
「ご主人様っ！　領収書こちらになってま～す！　他にご注文はよろしいですかぁ～？」
渉
「あーはい、おっけーでーす」

記述
……こりゃ破産だな。

記述
にしてもこの人、俺を知り合いの誰かと勘違いしてるのかなぁ。

記述
でもこんな美人な人だし、もうちょっと一緒に食事したい気もしないでもない……。

記述
……。

記述
うわぁ、めちゃめちゃ食ってる……食いすぎだろ、少しは遠慮しろよ高いんだから。

記述
３日間遭難してた人じゃあるまいし……あ、でも空腹で倒れるって相当だよな。

謎の女の人
「……？　なんだ？　人の顔をじろじろ見て……メシ顔についてる？」

渉
「あ、いえ……すっごくお腹すいてたんだなぁと思って……そんなに長い間食べてなかったんすか？」

謎の女の人
「あー、今日の昼ごはんを食べそこなっちゃってな～」

渉
「あーそうですか。そりゃあ無理もないっすよねぇ～」

記述
……なんなんだこの人。

謎の女の人
「……んん、俺は１食でもメシ抜くと腹が減って倒れちまうんだよ。なははは～」

渉
「は、はぁ……そうっすか」

記述
なんて不便な体質なんだろう……でも悪い人じゃなさそうだ。

謎の女の人
「普段はちゃんと弁当を作っているんだが、今日はたまたま作ってた弁当が食べられなくなっちゃって」

渉
「えーと、なら食堂があるんじゃ……」

謎の女の人
「そう！　そうなんだよ！　かわりに食堂に行って食べればいいと思ってたら、めちゃくちゃ人がいっぱいで！」

謎の女の人
「並んだ挙句に休みが終わって、結局一口も食べられなかったんだ」

謎の女の人
「初めて食堂というものに行ってみたが……食堂と言うのは、あまりにも恐ろしいものなんだなぁ……」（遠い目）

記述
どんな食堂だ……まるでうちの学食みたいじゃないか。

謎の女の人
「まぁだからずっと放課後まで我慢して、さっさと何か食うモン買おうと思っていた矢先、さっきのでエネルギーを使い果たしてしまったってわけ」

謎の女の人
「あの辺りは最近カツアゲ事件が多いらしいから、お前もカツアゲに遭わないように注意した方がいいぞ！」

渉
「はぁ……」

記述
もう遭ったけどね。

謎の女の人
「ところで……だ、お前は俺と知り合いだったっけ？　どうもお前の名が思い出せないんだけど……」

記述
きた……！　やっぱこの人の勘違いだったんだ！

記述
そりゃそうだよ。こんな美人、オレと知り合いのはずがないもん。

渉
「あー、たぶん勘違いされてると思うんですが、オレはあなたとは初めてお会いしたと思いますよ」

謎の女の人
「ふーん、お前は俺の知り合いではない……そういうことだな？」

記述
え、なんだよ。別にあなたのことは知らないよ。オレには友達居ないんだから。

謎の女の人
「まーうすうすそんな気がしてたっちゃ、してたんだけど」

謎の女の人
「お前のとぼけた顔をみて、どこかで会った事があるような気がしたよーな、しなかったよーな……と思ってね」

記述
曖昧だなぁ……曖昧な上に失礼だ。

謎の女の人
「とりあえず助けておけば問題ねーよな！　と思って助けたんだわ」

記述
アバウトも追加。

謎の女の人
「まぁ助けたつもりが逆に助けてもらって飯奢ってもらったわけだ！　ありがとな！」

渉
「いえいえこちらこそどうも」

謎の女の人
「さーて、腹も膨れたし……そろそろ本題に入るとすっか」

渉
「……ほ、本題？」

謎の女の人
「うん、俺にはもーちょいやることが残ってるんだわ」

渉
「はぁ……」

謎の女の人
「と言うわけだからお前も来い」

記述
ガシッ！

記述
唐突かつ強引にオレの手を握る。

渉
「は！？　ちょ、ちょっと！？」

謎の女の人
「まぁまぁいいからいいから」

渉
「いやいやまったくよくねーよっ！　今のやりとりの中でもどういうわけでオレが連れて行かれることになったのかさっぱりわかんなかったよ！」

記述
いきなり立ち上がった謎の女は、突っ込みを入れるオレをシカトしつつ、手をぐいぐい引っ張って店の外に連れ出す。

謎の女の人
「ありあとざぁーしたぁーっ！！」

メイドさん
「いってらっしゃいませお嬢様～」

渉
「め、メイドさん、オレを助けてええぇぇ～～！！」

メイドさん
「いってらっしゃいませご主人様～」

記述
……。

記述
……。

――

季節外れのサンタクロース　第一章００５　「ひとりぼっちを探せ」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、ぼっちすぎて場所と連絡先がわからない。放心しながらぶらぶら歩いていると不良に絡まれて踏んだり蹴ったり。そこに謎の女の子が不良をぶっとばしたかとおもいきや空腹で倒れ、飯を奢らされる。用事があるからお前も来いと無理やり連れて行かれた先はなんと……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００５

第一章００５

記述
無理やり連れてこられた先は宴会もできるような広めの料理屋だった。

記述
有無を言わさず店内に引っ張られ、店員に案内されるがままに二人で席に着く。

渉
「一体こんなところにまで連れてきてどうするつもりなんすか」

謎の女の子
「いいからいいから、せっかくなんだからちょっと付き合えって！」

渉
「付き合えって……」

謎の女の子
「あ、グラタン１つお願いしまーす」

記述
まだ食うのかよ。

記述
渋々席に座ると謎の女の子は、他人に聞かれないように小声でオレ

に耳打ちする形で喋った。

謎の女の子
「いいか、俺は今……有る条件に当てはまる人間を探してんだ」

渉
「はぁ……探せばいいじゃないすか」

謎の女の子
「お前も手伝え」

渉
「え、何でオレが」

謎の女の子
「あれを見ろ」

記述
また無視かよ……。

記述
なんだよ、あれを見ろったって……。

記述
あ……。

謎の女の子
「ちょうどいいところにクラス会っぽいのがいるだろ」

謎の女の子

「いいか、あの中で”ひとりぼっち”を見つけて欲しい」

渉

「……は？」

謎の女の子

「ひとりぼっちになってる奴だ。みんなと仲良くできない、一番友達がいなさそうな奴。俺はそいつを確かめに来たんだ」

謎の女の子

「俺は別のところからそいつを探す。友達がいなさそうな奴がいたら俺に教えに来い」

記述

何だ……？　何を言っているんだこの人は。

記述

何かわけのわからんことになってきたぞ……。

――

記述

オレはわけわからん美人に助けられ、飯を奢らされ、飯屋でひとりぼっちを探している。

記述

目線の先にはワイワイと楽しそうな学生たちの塊。

記述

……何の目的でこんなことしてるのか……まったく想像できない。

記述
どこぞの飯屋で宴会やってる生徒たちの群集……その中から”ひとりぼっち”を探し出すなんて……。

記述
あれとか言うから見てみたらなんだよ、あれ確実にオレのクラスの連中じゃねーか。

記述
オレのクラスで一番友達がいない奴……。

記述
それってオレのことだろ、どう考えても。

記述
ならさっきのあの人はオレに用があるってことなのか？　そういえば何か確認しにきたって言っていたが……。

記述
オレがひとりぼっちだっていうことを確認する事以外に何があるんだ。わざわざオレが実際にひとりぼっちになっているところを見物しにきたのか？

記述
でもさっきの人はオレのことを知らない……だから今探しているんだ、ひとりぼっちのオレを。

記述
……。

記述
何れにしろ、自分が行けなかったクラス会を影からこっそり見させられるなんてこれ以上ない罰ゲームだ。

記述
……さっきの人がオレに何の用があるのかは知らんがオレはあの人に用は無い。

記述
とりあえず一刻も早くこの場所から離れないと……クラスの奴らに見つかったら面倒だ。
――

記述
ふいー、やっと落ち着いたな……。

記述
ばれないように店の外に出て冷たい夜風を顔で受ける。効きすぎた室内の暖房の火照りを冷ます。

記述
あーあ、オレ何でこんなことしてんだろう……。

記述
クラス会には置いていかれ……下校途中に不良に絡まれ……変な女にメシおごって……。

記述
あれ、最後はいいんじゃね？

記述

まぁいいか……さーて、今日はぐっと疲れた……家に帰ってゲームでもやって疲れを癒しますかねぇ……。

記述
陽気に鼻歌を口ずさみつつ、家路につくために店の入り口を出る。

幹事の子
「……」

記述
……。

記述
……。

記述
うのおおおおオオォォッッほおぉぉぉぉあああああぁぁぁぁぁぁあっっ！！！？？？

記述
や、やっべえええぇぇ……っっ！！　超びっくりしすぎて大声上げちまうところだったっ！！

記述
オレを誘ってくれた幹事の子じゃないかっ！！　今一番会っちゃいけない人物にいきなり鉢合わせかよ……ッ！？

幹事の子
「……」

記述
……？　し、しめたっ！　まだオレに気づいてない！
記述
一般人のふりして前を過ぎ去り物陰に隠れよう……！
記述
スタスタ……。
幹事の子
「……」
記述
スタスタスタ……。
幹事の子
「……」
記述
スタスタスタスタ……。
記述
よ、よし……うまくバレずにすむか……っ！？
幹事の子
「……！　あ……！」
渉
「ぐぅっ！？」

幹事の子
「……イクシッ！！」

記述
……く、くしゃみかよ……驚かせやがって……。

記述
とりあえずバレなかったみたいだな……振り返られないうちに早く物陰に……っ！

記述
ふぅ……どうにかなったな。

記述
幹事の子、なんであんなところにいるんだよ……ふぅ、まだ心臓がドキドキしてやがる……。

記述
あれ、でもまだクラス会は終わってなかったよな……もしかして抜け出してるとか？

記述
じゃないとこんなところでひとりでなんて……。

記述
……あれ、ひとり？　ひとりと言えば……。

――――（回想）

謎の女の子

「いいか、あの中で”ひとりぼっち”を見つけて欲しい」

渉

「……は？」

謎の女の子

「ひとりぼっちになってる奴だ。みんなと仲良くできない、一番友達がいなさそうな奴。俺はそいつを確かめに来たんだ」

――――

記述

あの謎の女の人……ひとりぼっちのやつを探していたんだよな……？

記述

もしかしてあの人が探してた人物って、幹事の子じゃ……。

？？？

「おーい」

クラスの男

「はぁはぁ……待ったか？」

幹事の子

「もー、おそいよー」

渉

「……」

クラスの男

「抜け出すのに手間取ってさ……」

幹事の子
「ウソぼーっか。……しっかり見てたんだから。修ちゃんたら、女の子に話しかけられただけでデレデレ鼻の下伸ばしちゃってさ～」

クラスの男
「……女の魅力にはな……逆らえないんだよ……」

幹事の子
「わたしだって女の魅力あるよっ」

クラスの男
「お前に女の魅力ぅ？　残念ながらないな……」

幹事の子
「な、なにおっ！」

渉
「……」

謎の女の人
「……失恋ってやつ？」

渉
「う、うわあああっ！？　で、でたあああああぁぁぁぁぁっっ！？」

謎の女の人
「しっ、大声出すなよ！　ここにいるって気付かれるだろが」

渉
「いや、その……なんでそんなところにいるんすか」
謎の女の子
「お前が店出ていくのが見えたから」
渉
「だからってなんでゴミ箱の中に……」
謎の女の子
「しっ」
渉
「むが……っ！？」
記述
さっと手でオレの口を塞ぎ、抱き寄せられる。
幹事の子
「……？」
クラスの男
「どうした？」
幹事の子
「いや、今なんか声がしたような……きのせいか」

季節外れのサンタクロース　第一章００６　「鬼だ、鬼がいる」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。そんな渉がクラスメイトの女の子からクラス会に誘われたが、ぼっちすぎて場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。用事があるからお前も来いと無理やり連れて行かれた飯屋では、なんと自分のクラスが開かれていた。謎の女の子はひとりぼっちを探しているという。それ完全にオレじゃん。やってらんねぇと店から逃げ出した矢先に、クラス会に誘ってくれた女の子と鉢合わせした。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００６

第一章００６

幹事の子
「明日から修ちゃんのお父さんとお母さん……旅行に行くんだよね」

クラスの男
「あぁ」

幹事の子
「それじゃあ、私が毎日修ちゃんを起しに行ってあげなきゃ！」

クラスの男
「はぁ？　却下」

幹事の子
「なっ、どうしてさー！！」

クラスの男
「せっかく親がいなくて自由を満喫できるんだ。お前ごときに邪魔されてたまるか！」

幹事の子
「じゃあ明日行くから」

クラスの男
「あのー菜穂さん？　人の話聞いてた？」

幹事の子
「修ちゃんのお母さんから毎朝修ちゃんを起こしてあげてねって頼まれてるからね」

幹事の子
「修ちゃんのお弁当も、ちゃんと作ってきてあげるから」

クラスの男
「……へいへい」

幹事の子
「えへへ……」

――――

謎の女の人
「仲良さそうだな」

渉
「……実際仲がいいんじゃないのでございましょうか」

記述
……初恋の相手が彼氏持ち……。

記述
どんなことしたって結局はこんな結末がオレにはお似合いなんだよな……。

記述
なんかもうどうでもいいや……。

渉
「オレ、家に帰りますわ」

記述
……。

記述
……。

謎の女の子
「待てよ」

渉
「……？」

謎の女の子
「お前、あの子と知り合いなんだろ……？」

渉
「ただの、クラスメイトですよ」

謎の女の子
「ふうん……」

渉
「……」

謎の女の子
「……いいのか？　そんなこと言って。あの子はお前の好きな子じ

ゃないのか」

渉
「……なんでそんなことまで知ってるんですか」

謎の女の子
「あの子のところにあの男が来たときのお前の動揺っぷりは……ちょっと面白かったからな」

記述
くそう……めちゃくちゃ馬鹿にされてる。

記述
そりゃ動揺だってするだろ、好きな子が彼氏持ちなんて……しかも相手は小さい頃からの幼馴染って感じだし、対する俺はただのぼっち……オレの入る隙なんてないじゃないか……。

謎の女の子
「まぁ、諦めるしかないだろうな」

渉
「……」

渉
「オレ……友達いなかったから、今日の今日までクラス会があるってこと知らなくて……午後の授業の休憩時間のとき、あそこにいる子に教えてもらったんすよ……」

渉
「誘われたのがすっげえうれしくて、それで一目惚れして……」

渉
「クラス会行けばもしかしたら友達とかになれるかもって期待して、早く授業が終わるようにってワクワクしながら寝たんですよ」

渉
「……そしたら、誰もオレに声かけてくれないでやんの。起きたら教室に誰もいないんすよ」

渉
「後はまぁ……商店街でぶらぶらしてたところにあんたが来て、偶然かどうか知らないけどオレのとこのクラス会にあんたに連れてこられて……」

渉
「クラスのやつに見つかるのが怖くて……耐え切れなくなって逃げ出してきたんですよ」

渉
「……あんたがひとりぼっちのやつ探してんなら、とんでもない逸材が目の前にいますよ」

渉
「きっとオレは、ずっとひとりぼっちの運命なんだ。ハハ……あんたに目を付けられたのは、クラス会なんかに期待したバチがあたったって感じですかね」

渉
「幹事の子のこともすっぱり諦めて、今回のことを反省し、オレはオレらしく鉢の下のナメクジのように、ジメジメと生きていきますよ」

謎の女の子
「……長々とした一人語りはやっと終わりか？　もう少しで寝るところだったわ」

謎の女の子
「ぱっとしねぇやつ……暗すぎてカビが生えそうだ……ほんとにタマついてんのか」

渉
「ついてますよ、無駄に二つも。でもオレはこういう奴なんで」

謎の女の子
「こういう奴って好きな女の子に見つからないようにこそこそ隠れて逃げようとしてる根暗な奴のこと？」

渉
「あのですねぇ……」

謎の女の子
「……よっこいしょっと」

記述
オレが何か言う前に、女の人は静かに立ち上がった。

謎の女の子
「……お前がどれだけひとりぼっちの惨め野郎かはよく分かった」

謎の女の子
「なぁ……お前に、ひとつだけいいこと教えてやるよ」

記述
……？

謎の女の子
「いいか、人間なぁ……必死になって歯ぁ食いしばりゃ、大抵のことはどうにかなるもんだ」

謎の女の子
「今回のお前の場合も決して例外じゃねぇ……」

謎の女の子
「おわかり？」

渉
「は、はぁ……」

謎の女の子
「運命だバチだ言う暇があったら、必死になって足掻けるだけ足掻いてみろっ！！」

謎の女の子
「……うりゃあっ！！」

記述
ドカッ！　ドカッ！（蹴り上げられる音）

渉
「痛っ！　ちょ、ちょっ、なんでいきなり蹴るんすかっ！？　だっ……ちょっとやめ……っ！？」

謎の女の子
「いいから、さっさと、行って、こいっ！！」

渉
「い、行くってどこにっ！？」

謎の女の子
「あの菜穂とかいう女の子に……」

謎の女の子
「正面きって告白してこいっ！！」

渉
「え……」

渉
「え、えええええぇぇぇぇぇぇぇ！！？」

渉
「ちょ、ちょっと待ってくださいよっ！！　オレは別にあの子に告白したいとか思ってないっすよ！！　第一、もうオレはあの子のこと諦めようと……っ！？」

謎の女の子
「諦めるんなら告白しようがしまいが一緒だろうが、どうせ諦めるんならきっちり振られてからにしなっ！！」

渉
「そんな無茶な……っ」

謎の女の子
「歯ぁ食いしばれっ！！」

記述
ドカアアアンッ！！

渉
「ぐはぁっ！！？」

記述
ドカッ！　ゴロゴロゴロ、バタッ……！！

幹事の子
「……えっ？」

クラスの男
「……な、なんだっ！？　今の音……」

渉
「いつつ……」

記述
盛大に蹴りくれやがって……歩道に蹴り出されちまった……っ……
は、早く隠れないと見つかる……！！

謎の女の子
「菜ぁ穂さあああああんっ！！」

渉

「ちょっ！！？」

幹事の子
「今なんか物陰から大声で私の名前が……」

記述
鬼だ……鬼がいる……っ！

記述
やばい……っ！！　万事休すだ……っ！！　もうさっさとこの場から逃げ……！！

幹事の子
「熊谷……くん……？」

記述
……っ！！

季節外れのサンタクロース　第一章００７　「もしかして彼氏？」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。それ完全にオレじゃん。逃げ出した矢先に、クラス会に誘ってくれた女の子と鉢合わせ。ぎりぎり見つかっておらず物陰に隠れて様子見。彼氏登場。情けない様子の渉に、正面から告白してこいと蹴り出される。とうとう幹事の子にみつかってしまった。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。

第一章００７

第一章００７

幹事の子
「熊谷君……だよね？」

渉
「えっと……」

幹事の子
「ど、どうしてここに……」

記述
まずいな、とうとう見つかった……っ！！

記述
あーもーどうなってんだよーっ！　それもこれもみんなあの訳わかんない女の人のせいだ……！

記述
あいつにさえ会ってなければこんなことにはならなかったのに……くそっ……あー心臓バクバクいってきた……。

記述
本気で告白すんのかよ……冗談だろ……オレ、一体どうすれば……。

幹事の子
「あの……」

渉
「えっと……その……」

幹事の子
「……ご」

幹事の子
「ごめんなさい……っ！！」

渉
「……え？」

幹事の子
「私……熊谷くんに会場の場所知らせてなかったの忘れてて……気づいて学校に戻ったときも熊谷君、もう帰っちゃってたから……」

渉
「い、いや……その……」

幹事の子
「……え？」

渉
「お、お、お……オレが……その……寝てたオレが悪いし……」

渉
「連絡つかないのも元はといえば……オレに……友達が居ないせいだったり……」

幹事の子
「その……ご……ごめん……ね？」

渉
「う、うん……」

記述
どもりまくり……かっこ悪……。

記述
ってかなんだ、あの後教室に来てくれてたのか……幹事の子……えーっと、菜穂さんか。

記述
菜穂さんってやっぱええ子や……。

渉
「あの……な、なんでこんなところに……？　クラス会、まだ終わってないんでしょ？」

幹事の子
「あぁ、それはその……」

幹事の子
「あ……」

クラスの男
「ちーっす。えっと、熊谷……だっけ……？」

渉
「こんばんわ……」

クラスの男
「菜穂の友達？」

幹事の子
「あ、うん。今日ちょっと教室で話したの」

クラスの男
「へぇ」

幹事の子
「あ……えっと……しょ、紹介するねっ！　こっちは私の幼馴染で、今年からクラスが一緒になった黒崎修二くん」

黒崎
「うす」

渉
「……もしかして……か、彼氏？」

幹事の子
「か、か、か……彼氏って……っ！　修ちゃんとはそそそそそそんなんじゃないよー！」

黒崎
「ほう……そうだったのか」

幹事の子
「……もー……修ちゃんっ！？」

黒崎

「へいへい」

幹事の子
「……で、今日初めて知り合いになった熊谷くん」

渉
「どうも」

黒崎
「どうも、なんか菜穂が迷惑かけたみたいだな。ほれ、ちゃんと謝っとけよ？」

幹事の子
「うん、ごめんね……熊谷くん、私のせいでクラス会来れなくなっちゃって……本当にごめんなさい」

渉
「いやいやいや……そんなことないよ」

幹事の子
「で、でも……よくここが分かったね～、あ、もしかしてクラスの他の友達から連絡きたのかな？」

渉
「いや、オレ友達いないし……ここがわかったのはたまたまっていうか……俺にも何がなんだかよくわかんなくて……」

幹事の子
「そ、そう……なんだ……」

渉
「うん……」

幹事の子
「……」

渉
「……」

記述
会話続かねぇ……空気が重い……。

記述
……ドカッ！！

記述
あ、背後から何かゴミ箱蹴っ飛ばしたような音が聞こえる……聞こえないふりしよう。

渉
「き、奇遇だね。こんなところで会うなんて」

幹事の子
「そ、そうだね」

渉
「え、えっとぉ……お、オレは、たまたまここにいただけだから」

渉
「菜穂さん見つけたから、今日のこと言っとかないとって思ったっ

ていうか……なんていうか……」

渉
「今日の事は、ほんともー気にしないで。だいじょーぶだから。ノープロブレムです、むしろ気を遣ってくれてありがとうございました」

幹事の子
「……？　は、はい……」

渉
「えっと……あとは……」

幹事の子
「……？　あとは……？」

渉
「あとは……」

幹事の子
「……？」

渉
「……」

渉
「そ、それだけ……」

幹事の子
「……う、うん」

記述
ううぅ……言えるわけないだろ……。

黒崎
「……」

黒崎
「あれ？　もしかして熊谷って……」

渉
「へ？」

黒崎
「……」

黒崎
「いや、なんでもないわ」

黒崎
「終わった？」

幹事の子
「あ、うん」

黒崎
「そっか、じゃー俺たちフケるから。いやー中、騒がしすぎて落ち着かなくてさ～」

黒崎

「あ、もしよかったら今からでも参加していけば？　クラス会」

渉
「いや、さすがにそれは……」

黒崎
「そうか、残念だな……じゃ、俺たちはコンビニで肉まんでも買って二人で食うか、菜穂」

幹事の子
「に、肉まん……！？　肉まんって聞いて急に菜穂さんのお腹が減ってきたよ～！」

黒崎
「ははは、お前はいっつも腹空かしてんなぁ～」

幹事の子
「にっくまん、にっくまんっ」

黒崎
「わかってると思うけどお前の奢りだぞ」

幹事の子
「えええええ！？　それは初耳だよー！？　全然わかってないよー！」

幹事の子
「修ちゃん……こういうとき男の子が女の子に奢るものだよ？」

黒崎

「ふはははは、菜穂ごときに１００円も出せるわけないだろう。奢るならもっともっとかわいい女子にするわ」

幹事の子
「な、なにおーっ！！」

黒崎
「それじゃあ熊谷、また学校で！」

渉
「……あ、うん」

幹事の子
「熊谷くん、今日はごめんね！　それじゃまた学校で！」

渉
「……はーい、また明日～……」

幹事の子
「ばいば～い」

渉
「ばいば～い」

謎の女の子
「菜ぁ穂さあああああああああああああんっ！！！！」

幹事の子
「ふ、ふえええぇっ！？」

謎の女の子
「私、熊谷はあああっ！　菜穂さんに、大事な話がありまああああすっっ！！」

記述
……いやっほーい。やっぱ許してくれるわけねーよなぁ……。

黒崎
「……えっと？　なんか物陰で叫んでる人がいるけど……知ってる人？」

渉
「名前も知らないです……」

黒崎
「……？」

幹事の子
「えっ、えっ！？　わ、私！？」

渉
「なんでもないなんでもない、さぁ早く黒崎君と一緒に肉まん食べに行っ……」

謎の女の子
「菜ぁ穂さあああああああああああああああんっ！！！！」

渉
「Ｏｈ……」

記述
だめだ……。こりゃ言うまで叫び続けるぞあの人……。

幹事の子
「えっと……熊谷……くん？」

渉
「……はい」

幹事の子
「……大事な話……？　あるの……？」

渉
「……」

渉
「……うん」

季節外れのサンタクロース　第一章００８　「渡しはしないけど」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。逃げ出した矢先に、幹事の子と鉢合わせ。正面から告白してこいと物陰から蹴り出される。なんとかごまかそうとしてみるが、もう言うしかない状況に。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００８

第一章００８

幹事の子
「何かな？」

渉
「えっと……その……」

幹事の子
「……？」

渉
「……二人きりで話してもいいかな」

幹事の子
「え……うん、いいけど」

幹事の子
「修ちゃん、熊谷くんが私に何か用事あるみたいだから、ちょっと待っててね」

黒崎
「お、おう……」

幹事の子
「肉まん、買っといてねっ」

黒崎
「お前の分も食っといてやるよ」

幹事の子
「あー！！」

黒崎
「はよ行けアホ」

幹事の子
「……ぶー」

黒崎
「……」

黒崎
「熊谷……」

黒崎
「……」

黒崎
「……ちょっとぐらい貸してやるか。渡しはしないけど」

黒崎
「相手はあの菜穂だし、たぶん大丈夫だ」

黒崎
「ま、頑張って～」

記述
……。

記述
……。

――

幹事の子
「……」

渉
「……」

記述
……何となく連れ出しちゃったけど……どこ行こう。

記述
どっか落ち着ける場所……あ、そういえば近くに公園があったな……。

渉
「えっと、ここで」

幹事の子
「この公園？」

渉
「うん」

記述
うん、中に誰もいない……。

幹事の子
「よ、夜の公園って……なんか緊張するね」

渉
「す、すいません」

幹事の子
「あ、やっ、そういう意味じゃなくてっ！」

渉
「……」

幹事の子
「……」

記述
……。

記述
静かになった。

渉
「……」

渉
「こ、ここでいいかな」

幹事の子
「……はい」

記述
……やっぱい、緊張する。

記述
心臓バクバク言い過ぎて、なんか呼吸が苦しい……。

記述
そういえば……オレ、告白するのって初めてか……。

記述
これが告白か……。

幹事の子
「……大事な、話って？」

記述
来た。

渉
「……そ、その」

記述
……落ち着け……落ち着けよ……。

渉
「……オレ、今日……あんたにクラス会誘われたとき、めっちゃ嬉しかった」

幹事の子
「……」

渉
「実は、恥ずかしい話……オレずっとクラス会とかそういうの他人から誘われたことなくて……ずっと一人だったんだ」

幹事の子
「……うん」

渉
「いっつもつまんねぇ毎日だって思ってずっと過ごしてきたけど、もしかしたら何か変わるかもって思って、すっごくワクワクしてたんだ」

渉
「結局はいけなかったけど」

幹事の子
「ご、ごめん……」

渉
「あ、いや……っ！　オレはそういうことが言いたいんと違くて……！」

渉
「あああ……オレってば何言ってんだっ、アホか……っ」

渉

「ご、ごめん……オレ、こういうのって初めてで……すごくテンパってるんだ」

幹事の子
「ううん、ちゃんと聞いてる。大丈夫だよ」

幹事の子
「頑張って……っ！」

渉
「うん……」

渉
「オレ、気づいたら……」

渉
「菜穂さんのこと、好きになってた……」

幹事の子
「……」

幹事の子
「……はい」

渉
「今日会ったばっかりの人に、何言ってんだって思われるかもしれないけど……これがオレの気持ちです」

渉
「よ、よかったら……っ！！」

渉
「オレと付き合ってください……っ！！！」

記述
……。

記述
……。

記述
言い切った……っ！

記述
言い切ってやった……っ！！

記述
あああ……顔が熱いのが止まんねぇ……っ！！　めっちゃ緊張する……っ！！

幹事の子
「……熊谷くん」

渉
「はい」

幹事の子
「……」

幹事の子

「……ありがとう、熊谷くんに好きだって言ってもらえるなんて、私とっても嬉しいよっ」

渉
「……はい」

幹事の子
「熊谷くん、すごく勇気がある人なんだね……尊敬します」

渉
「……えっ？」

幹事の子
「今日、私と初めて会ったのに、好きだって伝えられるなんて……すごいことだと思う。ちょっと熊谷くんが羨ましいよ……」

幹事の子
「私は、好きな男の子がいても……ずっと気持ちを伝える勇気がでなくて、何年も何年もそのままだもん」

幹事の子
「だから、熊谷くんが気持ちを伝えてくれたのは、すっごく嬉しいよ！　ほんと私なんかでいいのっ！？　って、なんだか申し訳なくなっちゃうよ」

渉
「菜穂さん……」

幹事の子
「だけど……熊谷くんの気持ちには、答えられない……」

幹事の子
「ごめんなさい」

渉
「……」

幹事の子
「私には、好きな人がいるから……ごめんね」

渉
「いや……いいんだ……こっちこそいきなりこんな事言ってごめん……」

幹事の子
「いやいや……そんなことないよ」

渉
「……」

幹事の子
「……」

渉
「……」

幹事の子
「あ、でもでも……っ！　まだ私熊谷くんの事よく知らないし……っ！　話してみた感じ、熊谷くんのこと嫌いじゃないよっ！」

幹事の子
「だ、だから……友達としてこれから仲良くしてくれると、うれしいなっ」

渉
「……はい」

幹事の子
「……く、熊谷くん……？」

渉
「ぐすっ……ぐすっ……うっ……」

幹事の子
「えっ、ええっ！？　ちょ、熊谷くんっ、泣いてるのっ！？」

渉
「いや……泣いてない、泣いてないから……ぐすっ……」

幹事の子
「な、泣いてるよっ！　ごめんね、ごめんね……っ！　私が断ったから……い、今ハンカチで……っ」

渉
「大丈夫……大丈夫だから……っ、うっ……うあああああ……」

記述
……。

記述

……。

記述

……。

――

季節外れのサンタクロース　第一章００９　「責任は取ってやる」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。クラス会に誘ってくれた幹事の子にひとめぼれ。だがぼっちすぎてクラス会の場所と連絡先がわからない。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。逃げ出した矢先に、幹事の子と鉢合わせ。正面から告白してこいと物陰から蹴り出される。公園で二人きりになって告白したが、振られて男泣きする渉。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第一章００９

第一章００９

渉
「ずー……」

幹事の子
「落ちついた……？　熊谷くん……」

渉
「うん、ごめんな……かっこ悪くて」

幹事の子
「そんなことないよ」

渉
「ずー……」

渉
「……落ち着いた」

渉
「悪ぃ、迷惑かけちまって……」

幹事の子
「ううん、いいよいいよ。」

渉

「もう大丈夫だから……」

幹事の子
「うん、わかった」

記述
ハンカチ……ずぶ濡れじゃないか……よく泣いたなぁ……。

渉
「ハンカチ、洗って返すよ」

幹事の子
「いいよいいよ、気にしないで」

渉
「いや、そんなわけには……」

幹事の子
「いいからいいから」

渉
「……ありがとう」

幹事の子
「どういたしましてっ」

記述
……やっぱり、ええ子や……。

記述

あーあ、振られちゃった……。

記述
でも……なんだろう、なんか心地いいや。

渉
「ねぇ、菜穂さん」

幹事の子
「はい」

渉
「菜穂さんの好きな人ってもしかして……」

幹事の子
「うん……」

幹事の子
「熊谷くん、勇気だして言ってくれたんだもん。熊谷くんにだけは教えてあげる」

幹事の子
「私の好きな人は……修ちゃんだよ」

幹事の子
「子供のころからずっと好きなんだけど、ずっと言えないままでいるんだ……」

渉
「いつか……言えるといいね」

幹事の子
「うん、ありがとう」

幹事の子
「そろそろ私行かなきゃ。修ちゃんに私の肉まん食べられちゃう」

渉
「そりゃ大変だ」

記述
立ち上がって幹事の子を見送る。ついでにズボンについた土の汚れを払い落す。

記述
地面が湿ってて、ちょっと染みになったかも……。

幹事の子
「……熊谷くーん！」

渉
「……なーにー？」

幹事の子
「さっきの事、私と熊谷くんだけの秘密だからー！」

幹事の子
「絶対誰にも喋っちゃだめだよー！」

渉

「……わーかったーよー！」

幹事の子
「それじゃ、また明日学校でー！　ばいば～い！！」

渉
「ばいば～い！！」

渉
「……」

渉
「……はぁ、振られちゃった」

記述
……まぁ無理だって分かってたけどね。

???
「……やればできるじゃんか」

謎の女の子
「かっこよかったぞ。お前」

渉
「やっぱ見てたんすか」

謎の女の子
「……どうよ、気分は」

記述

そう言われて、ちょっと夜空を見上げてみる。

記述
星がきれいだな……。

渉
「……」

渉
「悪くは、ないっす」

記述
結果はうまくいかなかったけど、言って良かったかも……。

謎の女の子
「……そうか、よかったな」

渉
「でも、どうしてくれるんすか。やることが無茶苦茶っていうか……あんたのせいで初恋の人に振られちゃいましたよ」

謎の女の子
「なんだ、初恋だったのか。初恋がこんなんじゃ散々だな、ハッハッハッハ」

渉
「笑い事かよ……」

謎の女の子
「まぁ、安心しろ。ちゃんと責任取ってやるよ」

渉
「……はい？」

謎の女の子
「こうなったのもまぁ俺のせいだ。ちゃーんと責任取ってやるってんだよ」

渉
「オレ、冗談で言ったんですけど」

謎の女の子
「まぁ、任せておけ。まぁ、何もなくてもどうせ同じことだったろうからな」

渉
「……？　何言ってんすか」

謎の女の子
「詳しいことは明日学校で話してやる……さーて、これで俺の用事は済んだ、俺も帰るかな」

渉
「用事……？　そうだ、あんたオレに用事があったんだろ？　なんか確認したいことって……」

謎の女の子
「もう済んだ」

渉

「……？」

謎の女の子
「俺の確認したかったことは、お前がひとりぼっちかどうか、その現状を変えたいかどうか……」

謎の女の子
「そしてその現状を本当に変える決断をすることが出来るかどうかだ」

渉
「あんた……」

謎の女の子
「そうだな、もうひとつ用事が出来た」

謎の女の子
「これから付き合い長くなるんだろうし俺の名前はちゃんと呼んでもらわねぇとな」

謎の女の子
「俺の名前は、『菊池　麗』だ」

渉
「菊池……麗……」

麗
「ああ、一応お前の一個上だからちゃんと先輩をつけろ」

渉

「は、はぁ……」

麗

「明日、学校でまたお前を呼びだす……その時に最終確認をする」

渉

「最終……確認？　何すかそれ」

麗

「お前……送ってみたくない……？」

渉

「その……何がです？」

麗

「”ゲームの主人公”……みたいな青春」

季節外れのサンタクロース　第二章００１　「靴箱の中の手紙」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。店から逃げ出した矢先、初恋の人である幹事の子と鉢合わせする。現実から目をそむけようとする渉に謎の女の子は告白しろと迫り、強引ながら渉に告白させた。謎の女の子は「責任を取ってやる」といい、同時に謎の言葉を残して去った。女の子は菊池麗と名乗った。渉は家に帰り、菊池が言った言葉の意味を考える……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第二章００１

第二章００１

記述
家に帰った俺は、部屋のベッドの上に体を投げ出して物思いにふけっていた。

記述
菊池とかいう女の人が言っていた言葉の意味……どうも気になる……。

――

麗
「お前……送ってみたくない……？」

渉
「その……何がです？」

麗
「”ゲームの主人公”……みたいな青春」

――

記述
……。

記述

ゲームの主人公みたいな青春を送る……ねぇ……。

記述
確かにそれは常日頃考えていたことだ……。

記述
代わり映えのない毎日が嫌で、何かが起こって欲しかった。だからクラス会に誘われたときはすごくうれしかったんだ。

記述
そういえば菊池って人とはじめてあった時、オレを知り合いだと思ってたんだよな。

記述
結局は勘違いだって言っていたが……実際にオレのクラス会に連れて行き、オレの反応を見ていたんだ。オレを知らなかったわけではなかったんだろう。

記述
ひとりぼっちを探せとか言っていたんだったな……。

――

謎の女の子
「いいか、あの中で”ひとりぼっち”を見つけて欲しい」

渉
「……は？」

謎の女の子

「ひとりぼっちになってる奴だ。みんなと仲良くできない、一番友達がいなさそうな奴。俺はそいつを確かめに来たんだ」

――

記述

……そう、菊池って人が言うひとりぼっちというのはオレの事だった。

記述

その現実を目の前に突き付けられ、腐って逃げようとしたオレを捕まえ、強引に幹事の子に告白させた……。

――

渉

「用事……？　そうだ、あんたオレに用事があったんだろ？　なんか確認したいことって……」

謎の女の子

「もう済んだ」

渉

「……？」

謎の女の子

「俺の確認したかったことは、お前がひとりぼっちかどうか、その現状を変えたいかどうか……」

謎の女の子

「そしてその現状を本当に変える決断をすることが出来るかどうかだ」

――

記述

……。

記述

……そしてそのひとりぼっちのオレに、楽しい青春を送りたくないかと訊ねたんだ。

記述

……菊池って人の目的は何なんだ？　その目的とオレに何の関係がある？

記述

……ふーっ、考えれば考えるほどこんがらがっていくぜ……。

記述

オレには菊池って人に何の目的があるのかはわからない……。

記述

だが、なんだか菊池って人の言葉が……どこか普段の現実とかけ離れた、まったく異質な感じがして、頭から全然離れてくれない……気になってしょうがないんだ。

――

謎の女の子

「まぁ、安心しろ。ちゃんと責任取ってやるよ」

渉

「……はい？」

謎の女の子

「こうなったのもまぁ俺のせいだ。ちゃーんと責任取ってやるってんだよ」

渉

「オレ、冗談で言ったんですけど」

謎の女の子

「まぁ、任せておけ。まぁ、何もなくてもどうせ同じことだったろうからな」

渉

「……？　何言ってんすか」

――

麗

「明日、学校でまたお前を呼びだす……その時に最終確認をする」

――

渉

「明日、学校で最終確認……か……」

渉

「……ん、学校……で？　どういうことだ？　オレがどこの学校に通ってるとかは教えてないはずだが……」

記述
……。

記述
……。

――

記述
ふ、ふあああ……。

記述
あの後もよくよく考えてみたが、何度考えてもやっぱりわからん……。

記述
そのおかげで昨日はろくに寝る事ができず、午前、午後の授業は全部寝て過ごしちまった。おかげで今日一日誰ともしゃべっていない。

記述
やっぱオレ、主人公には程遠いよな……。

記述
……。

記述
……ゲームの主人公に、オレはなる！！

記述
……。

記述
……。

記述
うっわ、かっこ悪っ！！

記述
言っててすごく恥ずかしいな……これ。

記述
なんかすでにゲームっぽい出来事に巻き込まれているような気がしないでもないが……。

記述
美少女が出てきて、飯おごらされて、強制告白させられて……今日楽しい青春を送りたいかを最終確認されるんだ。

記述
なんというか、うん。

記述
……。

記述
これって悪い夢なんじゃないだろうか……いくらなんでも非現実的すぎ……だ？

記述
……そ、そうかっ！　そうだ、そうだよ……！　これはきっと悪い夢だ！！

記述
きっとオレは夢を見ていたんだ！　ゆくゆく考えてみれば不良に絡まれているところに美少女が助けてくれるって時点で十分怪しい！！

記述
うんそうだ、きっと夢だ。夢に違いない！

記述
きっとゲームの主人公になりたいと思いすぎて見てしまったオレの悲しい幻想だったんだ！

記述
うわぁ……。

記述
……と、とにかく、だいたいもう学校は終わりだ。呼び出しらしい呼び出しはなかったし、すべてはオレの夢だったって事で今までのありえない展開の説明がつく。

記述
そういえば以前、学校の体育館裏に来てくださいと書いてあった手紙をもらったことがあったけど、喜んで行ったら普通に上級生にシメられたことがあったなぁ。

記述
まぁしらん。もう帰ってしまおう、家に。呼び出されないうちに帰

ってしまおう。

記述
鞄を肩に担いで、人気の少なくなった廊下を歩く。

記述
一番左端の右から3番、下から5番目がオレの靴箱だ。

記述
靴箱の中に右手を差し込んで、外履きに履き替えようとする。

記述
……さーて靴、靴……っと。

記述
……。

記述
……あれ、無い。

記述
オレの靴がない。

記述
オレの履きつぶした外履きがちょこんとここに置いてあったはずなんだが……。

記述
もっと奥か？　と思って手をもっと伸ばしてみる。

記述
カサッ……。

記述
……おや？

記述
指先に触れた何かを手に取り、靴箱から抜き出してみた。

記述
……手紙だ。

記述
自分の靴が消えた代わりに、シールで簡単に封されたメモ用紙のような手紙が入っていた。

記述
シールを外して中身を見てみる。

記述
……。

記述
……。

記述
……まぁ、わかっていたけど……ね。

記述
この夢、まだ続いてたのか……。

記述
場所は、どっかの教室みたいだな……行ってみるか。

記述
……。

記述
……。

――

季節外れのサンタクロース　第二章００２　「黒板消しトラップ」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。自分のクラス会が開かれているところに連れていかれ、ひとりぼっちを探せといわれた。店から逃げ出した矢先、初恋の人である幹事の子と鉢合わせする。現実から目をそむけようとする渉に謎の女の子は告白しろと迫り、強引ながら渉に告白させた。謎の女の子は「責任を取ってやる」といい、同時に謎の言葉を残して去った。女の子は菊池麗と名乗った。麗の言った意味を考えつつ学校を過ごしていると、自分の靴箱の中に麗からの呼び出しの手紙を発見した。笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第二章００２

第二章００２

記述
夕日が差し込む渡り廊下を抜けて別校舎へと向かう。

記述
別校舎というのは移動教室の時にしか使用していない後者で、普段ホームルームとかする教室は全て本校舎にある。

記述
放課後となると必然的に誰もいない。

記述
無人の階段で３階まで登りすぐ脇の廊下を右に曲がると、誰も使っていなさそうな空き教室がいくつか並んでいる。

記述
手紙に書いてあった呼び出し場所はこの一番奥の教室みたいだけど……。

記述
……電気がついていない、まだ誰もいないみたいだ。

記述
コンコン。

記述

軽く扉をノックする。

記述
ガラガラッ。

渉
「……失礼しまーす」

記述
年季の入った重いドアを開け、中に入る。

記述
やはり誰もいない。

記述
教室の中には埃のかぶった机や古くなった椅子が転がっている。長らく使われた形跡はなく本当に誰も使用していないようだ。

記述
以前は使われていたであろう授業道具が、教室の隅にさびしく転がっている。

渉
「あの……」

記述
声を出してみる、が……やはり返事は帰ってこない。

記述
まぁ、適当に待つか……。

記述
そこらへんにあった机の埃を手でぱっぱと払って適当に腰掛ける。

渉
「んしょっと」

記述
机に体重を預けると、どこか錆びついているのか苦しそうにキィッと鳴った。

記述
何とも言い表せないような、どことない寂しさが感じられる。

記述
さて、これからどうしようかね。

記述
ただ座って待っているだけでは手持無沙汰ではあるし、雑談でもできる話し相手もいない。

記述
教室にあるものを物色してみるのもいいが、てが埃で汚れそうだし、何かの間違いで備品を壊しても面倒だ。

……かといってこのまま何もせずに待つのも芸がない。

記述
真正面にある黒板を見つめる。

記述
……。

記述
……そーいや、今んとこオレいいとこなしなんだよなぁ。

記述
クラスでハブられるわ、不良に絡まれるわ、初恋の人にフラれるわ……。

記述
別に不幸体質というわけでもないけれど、しょっぱなから何か扱いがひどいような気がする。

記述
考えてみれば今現在進行形で、空き教室に呼び出された挙句待たされるというなんとも不平等な立場を強いられている。

記述
昨日の飯奢らされたりいっぱい蹴られたりしたのも含めれば、もう立派ないい子分じゃないか。涙が出る。

記述
やばいな……あの菊池っていう人に主導権を握られはじめている……これは良くない、決して良くないぞ。

記述
どうにかできないものか……。

記述

そうだな……ここら辺で何か、思いがけない先制ジャブみたいなもんを菊池先輩に食らわせられれば……オレの立場も回復して、主導権を奪い返せるかもしれないな。

記述
ちょうどここは空き教室……役に立ちそうな道具はいっぱい転がっているし、罠を仕掛けるにはもってこいだ。

記述
くくく、あの菊池先輩の慌てふためく様が目に浮かぶ……。

渉
「……よぉし、決まりだな」

記述
そうとなればすぐさま作戦開始だ。

記述
オレの頭の中でゲームスタートという文字が浮かび、ピィィィっ開始のホイッスルが鳴った。

渉
「……よっと」

記述
机から飛び降りて前に進み、黒板の前に立ってみる。

記述
普段使われていない教室なので、当然のようにチョークも黒板消しもない。

渉
「適当な教室から借りてくればいいな」

記述
オレは菊池先輩に一矢報いるべく、空き教室から廊下へ出た。

――

――

記述
廊下から元の空き教室へと戻る。

記述
放課後なので教室に残っている生徒はおらず、簡単に目的物を失敬することができた。

記述
チョークと、それを消すための黒板消しを一つ程。

記述
帰るときにきれいにして返しておけば怒られることもあるまい。

記述
「ガラガラッ」

渉
「……しめしめ……まだ菊池先輩は来ていないな……」

記述
扉を完全には閉めず少しだけ開けておき、用意した黒板消しを左手に持ち替える。

記述
黒板消しを逆さにし、布部分にチョークをよく塗って……と。

記述
うむ、真っ白だ。

記述
チョークを塗った黒板消しを持って、扉のできるだけ高い位置に黒板消しを挟んでおく。

記述
菊池先輩は背は少し高めだったが、まぁきっと気づかないだろう。

記述
扉から手を放して……。

記述
落ちない。

記述
黒板消しを下から見上げてみる。粉はたっぷりついているな。

記述
これで扉を開けた際に菊池先輩はまちがいなく彫刻になってしまうだろう。

記述

うん、完璧だ。

記述
ガラッ―。

記述
突然何者かによってドアが開かれ、両脇の力が無くなった黒板消しがゆっくりと自由落下し始める。

記述
チョークの粉がいっぱいついたそのトラップは、ちょうど真下にいたオレの顔面へと軟着陸した。

記述
……ぽふ。

記述
……。

記述
……。

記述
うん、彫刻になったな。

記述
まったく誰だ、扉を開けたやつは。

記述
制服にまでついたチョークの粉を払いながら、扉を開けた人物を確

認した。

季節外れのサンタクロース　第二章００３　「扉狭間の戦い」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。現実から目をそむけようとする渉に謎の女の子は初恋の子、菜穂に告白しろと迫り、強引ながら渉に告白をさせた。謎の女の子は「責任を取ってやる」といい、同時に「ゲームの主人公のような青春を送ってみたくないか」と謎の言葉を残して去った。女の子は菊池麗と名乗り。靴箱の中に手紙を入れて渉を秋教室に呼び出した。麗のために黒板消しトラップをしかけていると……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。

第二章００３

第二章００３

女の子
「……」

渉
「……」

女の子
「……」

記述
女の子だった。

記述
髪型はぴょこんと跳ねた可愛らしいツインテール。新しめの制服は大きめに採寸されており、どことなく子供っぽい体つき。

記述
オレより一回りは小さいな……たぶん女子の中でも低いほうだろう。

記述
扉の前に立っていた女の子は、目の前に現れたオレを見ても驚いた様子はなく、まったくの無表情でふてぶてしいまでにあっけらかんとしている。

記述

……新しく入った1年生ってところだろうか？

渉
「……扉を開けるときは気をつけてね」

女の子
「……分かった」

渉
「じゃ、その黒板消し返して」

女の子
「はい」

記述
開いた扉を再び閉め、黒板消しをまた扉の上部に挟み直す。

記述
よし。

記述
ガラッ！

記述
ぽふ。

記述
足元に落ちる黒板消し。

渉

「……」

女の子
「落とし物だよ」

記述
そういって女の子は落ちた黒板消しを渡す。

渉
「おう、悪いな」

記述
開いた扉を再び力強く閉め、もう一回黒板消しを仕掛けてみる。

記述
よし。

記述
ガラッ！

記述
ぽふ。

記述
もう一回黒板消しを仕掛けてみる。

記述
ガラッ！

記述

ぽふ。

もう一回黒板消しを仕掛けてみる。

記述
ガラッ！

記述
ぽふ。

渉
「だあああああああああああッ！！」

女の子
「わっ、びっくりするなぁ」

もう一回黒板消しを仕掛けてみる。

記述
ガラッ！

記述
ぽふ。

女の子
「落ちたよ」

渉
「そりゃ落ちるわあああああああああっっ！！！！」

女の子
「わっ、びっくりするなぁ」

渉
「扉を開けたら黒板消しを仕掛けられないだろうが！」

女の子
「私はこの教室に入りたいんだが」

渉
「おう、分かった。さっさと入れ」

女の子
「うん」

記述
なんなんだこいつは……。

記述
まぁいいや。気を取り直してもう一回黒板消しを挟んで……と……。

記述
ガラッ！

記述
ぽふ。

渉
「……」

女の子
「……」

渉
「……おい」

女の子
「……」

渉
「……おい」

女の子
「はい」

渉
「今度はどうした」

女の子
「トイレ行きたい」

渉
「後ろから出ろ」

女の子
「まかせろ」

記述
……。

記述
よし……いったな……。
記述
さぁ、再チャレンジだ……ドイツ軍人はあきらめない……。
記述
……。
記述
……。
記述
……。
記述
……よし！
記述
ガラッ！
記述
ぽふ。
渉
「……」
女の子
「……」

渉
「……」
女の子
「後ろから出た」
渉
「……知ってる」
女の子
「戻ってくるときは後ろっていわれてない」
渉
「後ろから出て後ろから入れ」
渉
「おーけー？」
女の子
「余裕」
記述
右手の親指をびしっと立てる。へし折ってやりたい。
渉
「お前、名前は？」
女の子
「美羽」

涉
「そうか、オレは涉だ。熊谷涉」
美羽
「きいてねーよ」
涉
「よし入れ」
記述
ガラガラ……。
記述
扉を開けて美羽を中に入れてやる。
記述
とてとてと中に入ったのを確認し、オレは再び扉を閉めた……。
記述
……。
記述
……クク。
記述
ククク……。
記述
……オレには……分かってるんだぜ……？

記述
ヤツは必ず次もやる……。

記述
オレに喧嘩を売るとはいい度胸だ……。近所ではいたずらっ子の渉ちゃんと恐れられているオレを相手に逃げられると思うな……。

記述
最後に笑うのは……オレだッ……！！

記述
ガラッ！

渉
「まだ仕掛けてねーよ！！」

菊池先輩
「なにやってんだお前は」

渉
「Ｏｈ……」

記述
人生は……厳しい……。

記述
……ん？　菊池先輩の後ろに誰かいるぞ……？

女子生徒
「……」

記述

あれ……えーっと、この娘何処かで……。

季節外れのサンタクロース　第二章００４　「季節外れのサンタクロース」（前

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。現実から目をそむけようとする渉に謎の女の子は初恋の子、菜穂に告白しろと迫り、強引ながら渉に告白をさせた。謎の女の子は「責任を取ってやる」といい、同時に「ゲームの主人公のような青春を送ってみたくないか」と謎の言葉を残して去った。女の子は菊池麗と名乗り。靴箱の中に手紙を入れて渉を秋教室に呼び出した。麗が呼び出した意図とは……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第二章００４

第二章００４

記述

あっ、ああ。思い出した。この娘確か……。

――――――――――

女子生徒

「瀬川、わるいねー」

女子生徒

「ありがとー、瀬川」

うどんの女子生徒

「あ……はい」

女子生徒

「ま、瀬川になるよねー」

女子生徒

「正直分かってたわー。瀬川が湯呑みになるの」

うどんの女子生徒

「……」

――

記述
前に食堂で見たうどんの娘だな……瀬川とかいったか。よくわからないがおどおどしているように見える。

記述
この娘も菊池先輩に呼ばれた……のか……？

記述
お、あと後ろにもう1人いるな……。

女子生徒
「……」

記述
長い髪を後ろでまとめたポニテっ娘。

記述
……なんか頭よさそうな子だ。

記述
どこか大人っぽいというか落ち着いた雰囲気、クールっていうか……言っちゃ悪いがあまり明るそうな子ではなさそうだ。

記述
あの手元に持ってるのは何だ……？　やけに分厚い本みたいだけど。

記述
六法……全書……。

記述

おいおい……。

菊池先輩
「よし、そろったな。じゃあ適当に席に着いてくれ」

記述
菊池先輩の言葉とともに適当に机と椅子を用意する。

記述
がたがた……。

記述
……。

記述
……。

菊池先輩
「……とりあえず自己紹介しようじゃないか。俺の名前は菊池麗、3年生だ。よろしくな」

菊池先輩
「じゃあ左から順番に」

渉
「オレは熊谷渉。2年」

真面目そうな女の子
「……天王寺、千尋です。同じく2年」

うどんの女の子
「瀬川結衣……2年生です」

美羽
「美羽、1年」

記述
順番に自分の名前を名乗っていく。

菊池先輩
「うん、全員揃ってるな」

結衣
「……あの」

菊池先輩
「ん？」

結衣
「人違いではないでしょうか……わ、私……ここの誰とも知り合いじゃないんですけど……？」

菊池先輩
「いいや、人違いじゃなく間違いなくお前らだ。お前らを呼び出したのは俺だ」

菊池先輩
「お前らに用があってここに集まってもらった」

菊池先輩

「その用っていうのは今から説明する」

菊池先輩
「すぅ……」

菊池先輩
「……短刀直入に言う、オレには”ある目的”がある。それについて、お前らに頼みがある」

渉
「頼み？」

結衣
「というと……」

千尋
「……」

菊池先輩
「……」

菊池先輩
「俺とお前らで……」

菊池先輩
「”秘密結社”を結成する！！」

結衣
「え、え……えええええ！？」

千尋
「……！！」

渉
「……はあ！？」

美羽
「……」

結衣
「えーっと……ひ、秘密結社って……何をするところなんですか……？」

菊池先輩
「秘密結社とは……」

千尋
「……秘密結社とは一般に政府などの公的機関以外の会員制の組織で、その結社の存在そのものを隠しているクラブ、団体、会のこと……」

千尋
「通常は入社儀式等の非公開の儀式を伴う組織である」

菊池先輩
「……と、いうことだ」

菊池先輩
「政治的なものから会員同士の親睦を目的としたものもある。有名どころとしてはフリーメイソン、ＫＫＫ、トゥーレ協会なんかが秘

密結社だ」

菊池先輩
「俺は、お前たちと秘密結社を作りたいと思っている」

渉
「は、はあ……」

菊池先輩
「もちろん俺は政治をどうこうしたいと思ってるわけではなく、目的としては主にさっき言ったとおり、会員同士の親睦だ」

菊池先輩
「俺はな……楽しいことがしたいんだ」

渉
「楽しいこと、ですか」

菊池先輩
「ああ」

菊池先輩
「俺は今年でもう3年……思い出すのは部活の練習や炎天下の中やった体育祭、みんなでやった文化祭、眠い目をこすりながら受けた授業……」

菊池先輩
「この3年間、いろんなことがあった。楽しかったことも、つらかったことも……」

菊池先輩
「だが……本当に、このまま高校生活を終わらせてしまっていいのだろうか」

菊池先輩
「入学当時……自分が想像してた高校生活を送れたのだろうか……」

菊池先輩
「俺にはもう学生としていられる時間はあまり残されてはいない」

菊池先輩
「だからこそ、学生のうちにやり忘れたこと……やっておきたかったこと……何かないだろうか？　このまま卒業して、何も後悔しないだろうか」

菊池先輩
「このまま”普通”で”何もなかった”ことにしていいのだろうか」

菊池先輩
「あることをきっかけに、俺はそういうような事を強く感じるようになった」

渉
「……」

結衣
「……」

千尋
「……」

美羽
「……」

菊池先輩
「漫画でも小説でもいい。俺たちが子供の頃読んだ物語ではいつも舞台は学校だった」

菊池先輩
「その中の主人公ってのは、すごくカッコ良くて、魅力的で」

菊池先輩
「いつか自分の人生の中にも、特別な何かってもんが現れる時が来るって思ってた」

菊池先輩
「そりゃ実際に女の子は空から降ってきたりはしないし、異世界に飛ばされるなんてことが起きると思いやしない」

菊池先輩
「だけど、そんな状況の中にある、キラキラした何かってのは、自分もいつか味わうもんだと思っていたんだ」

菊池先輩
「学校っていう同じ場所で、同じ勉強して、同じ飯食って、同じように過ごしていれば……いつかきっと」

菊池先輩
「……いつだ？」

菊池先輩
「……子供の頃みた漫画とかアニメの”アレ”は、いつになったら経験できるんだ？」

菊池先輩
「俺は今、いつも見ていた主人公と同じ、学生という位置に立っている」

菊池先輩
「”アレ”を経験するなら今以外にいつだっていうんだ？」

菊池先輩
「ずっと俺は……現実と理想のギャップに葛藤しながら暮らしてた」

菊池先輩
「だから俺は、この学園生活、絶対後悔しない生活を送りたいんだ！」

菊池先輩
「お前らは……どうだ？」

渉
「……」

結衣
「……」

千尋
「……」

美羽
「……」

記述
たしかに……菊池先輩の言うとおりだ。

記述
この1年間、今までと何が違った？

記述
送ってきたのは、ただ日常に身を任せて流される生活……。

記述
これから卒業まで、一体今までと何が違うだろうか？

菊池先輩
「俺は、とても大切な物を失くしていた」

菊池先輩
「もう取り戻せないかもしれないが……それでも俺は取り戻したい」

菊池先輩
「勉強なんかより……もっともっと大切な物だ」

菊池先輩
「俺はその大切な物を取り返すべく、秘密結社を結成する」

菊池先輩
「これがこの秘密結社を結成する意義だ」

菊池先輩
「これからお前らには、俺が運営する秘密結社の会員として、色々と協力してもらいたい」

菊池先輩
「では秘密結社の目的とは……」

記述
スッ……。

記述
ん、なんだ？

記述
菊池先輩のはなしの途中で、天王寺が無言で手を挙げた。

菊池先輩
「なんだ？」

千尋
「……すいませんが私は遠慮させてもらいます」

渉
「……！」

菊池先輩
「ほう」

千尋
「青春時代を楽しく過ごしたいという先輩の言い分はわかりました」

千尋
「ですが……青春時代が過ぎ去ったとしても、私たちには必ずその先がある……」

千尋
「家庭環境や身体的な理由など……全員が全員先輩と同じ、先の事に何の心配のいらない裕福な人間ばかりではないんです」

渉
「……っ」

千尋
「先輩には分からないかもしれませんが、青春時代をいくらよく過ごしたくても、そんなことを思ってられないぐらいひどい状況の中で今を必死に頑張ってる人間もいるんだ」

千尋
「青春時代を遊んで過ごしている暇はないんです」

千尋
「私たちは……もう子供じゃない、いつまでも子供みたいなことを言うのは許されない」

千尋
「私から言わせれば、甘いと思います」

菊池先輩
「……」

千尋
「私はこれから用事があるので……帰ります」

記述
……。

記述
おいおい、いいのかよ。帰っちまうぞ。

記述
……っていってもこんだけ言い負かされちゃあな……。

菊池先輩
「――――サンタクロース」

千尋
「……？」

菊池先輩
「天王寺、お前……何歳までサンタクロースを信じてた？」

千尋
「いきなり何を……」

菊池先輩
「いつから、サンタクロースを信じなくなったんだろうな」

菊池先輩
「子供の頃のクリスマスの夜。サンタクロースにお礼を言おうとベッドの中で密かに起きておいたり」

菊池先輩
「両親にサンタさんへの手紙を届けてもらったり……」

菊池先輩
「大人になっていくにつれて、いつのまにか信じなくなってしまったよな」

菊池先輩
「現実を受け入れて行くことそういうことが……大人になっていくってことかもしれん」
千尋
「……」

菊池先輩
「たしかに天王寺の言う通りだ。自分の生活を一変させるような出会いとか、ゲームの主人公みたいな青春を送りたいと思う事」

菊池先輩
「それはサンタクロースを信じる子供と同じかもしれん」

菊池先輩
「だが俺たちは、まだ高校生だ」

菊池先輩
「私たちは子供ではない……だが大人でもない」

菊池先輩
「私たちはまだ、サンタクロースを信じても許されるんだ」

千尋
「……」

渉
「……」

結衣
「……」

美羽
「……」

菊池先輩
「千尋……お前はもう確かに大人なのかもしれん。だがな、本当にこのままでいいのか？」

千尋
「……？」

菊池先輩
「今の現状、悲惨な現実をそのままにして、それを本当に受け入れたと言えるのか？」

千尋
「……あんたに何が分かる」

菊池先輩
「ああ、確かに知らん」

生徒
「ならなぜ――」

菊池先輩
「なぜお前らをわざわざ選んだか」

菊池先輩
「俺がどういう基準でお前らを選んだか、教えてやろう」

菊池先輩
「俺は教室を適当に回って、そこにいた適当な生徒にこう尋ねてみた」

菊池先輩
「”お前らのクラスで一番友達がいない、浮いてるやつは誰だ？”ってな」

千尋・結衣・渉
「……！？」

美羽
「……」

菊池先輩
「一応何人かに聞いたが、ほとんどがお前らの個人名を答えた」

菊池先輩
「お前ら全員、少なくともこの学校での生活はいいものではないはずだ」

菊池先輩
「わざわざ言わなくても、自分自身が一番わかってるはずだろう」
菊池先輩
「そしてそれを一変させたいと思っていることもな」
渉
「……」
菊池先輩
「だがな、だからこそ俺はお前らを選んだんだ」
菊池先輩
「今の生活を一変させる非日常と出会うことを、何より願っていたのは……お前らのはずだ」
菊池先輩
「そうそう、秘密結社の目的……途中だったな」
菊池先輩
「秘密結社の目的……それは」
菊池先輩
「”貴様ら自身の青春を取り戻すこと”だ」
渉
「……！？」
結衣
「……！」

千尋
「えっ……」

菊池先輩
「お前らにとって生活を一変させる非日常に……お前らに幸福と言う名のプレゼントを持ってきたサンタクロースに、俺がなってやる」

菊池先輩
「この季節外れのサンタクロースを、もう一度信じてみる気はないか……？」

菊池先輩
「なぁ、天王寺……」

千尋
「……」

菊池先輩
「おら、どうした！　お前らがずっと望んできた非日常の入り口が今目の前に立ってる！」

菊池先輩
「多くの主人公が自分の普通の日常を返せだなんだとうだうだグジグジしてるがな、同じように思うんだったら、かまわずこの教室から出てっていい！」

菊池先輩
「俺が、お前らに最高の青春を送らせてやる！！」

季節外れのサンタクロース　第二章００５　「俺たちは仲間だ」（前書き）

あらすじ。　主人公なのにひとりぼっちの渉。不良に絡まれていた所を謎の女の子に助けられ、飯を奢らされる。現実から目をそむけようとする渉に謎の女の子は初恋の子、菜穂に告白しろと迫り、強引ながら渉に告白をさせた。謎の女の子は「責任を取ってやる」といい、同時に「ゲームの主人公のような青春を送ってみたくないか」と謎の言葉を残して去った。女の子は菊池麗と名乗り。靴箱の中に手紙を入れて渉を秋教室に呼び出した。教室には知らない女の子たち３人。渉と麗と、この３人で、秘密結社を結成する。……笑いあり涙ありの学園青春ストーリー。　第二章００５

季節外れのサンタクロース　第二章００５　「俺たちは仲間だ」

第二章００５

記述
菊池先輩によって呼び出されたオレたちは、菊池先輩の圧倒的なまでの気迫に押され、先輩の言うとおりに秘密結社の話に乗ることにした。

記述
先輩が結成したのは、ひとりぼっちの俺達の青春を取り戻す事を目的とした秘密結社。

記述
それは菊池先輩がオレ達に最高の青春というプレゼントをくれるサンタクロースになると言うものだ。

記述
各々入会の意を確認し、その場にいる全員が秘密結社の会員になることが決定したところで菊池先輩は秘密結社の具体的なことについて話し始めた。

菊池先輩
「秘密結社の名前は”季節外れのサンタクロース”だ」

菊池先輩
「活動については主にお前らの青春を取り戻すことを目的とし、会員同士の親睦、ついでとして自分たちの正義に基づく他人への奉仕活動をする」

菊池先輩
「他人への奉仕活動ていうのは、簡単にいえば”いいことをする”ってことだ。これはこの秘密結社”季節外れのサンタクロース”という名前を売るためであり、世間に広く広めていきたい」

菊池先輩
「お前達自身がサンタさんとなり、他人を幸せにするプレゼントをあげるというイメージでいい。秘密結社の名前もそこから来ているんだ」

菊池先輩
「肝心なお前らの青春は、俺が責任もって最高の青春を送らせる。会員同士親睦を深めながら楽しくやっていこうというわけだ」

菊池先輩
「だからお前らは、俺を信じてただついてきて欲しい」

渉
「その、オレ達に最高の青春を送らせる方法って、具体的にはどうやって……」

菊池先輩
「普通にお前たちと活動する以外にも”お前たちの青春を取り戻す方法”をすでに俺が用意している。残念ながらこれはお前達には教えられないものだ」

菊池先輩
「そのために必要な行動を俺が指示するから、お前らは指示に疑問を持たず、ただその通りに動いて欲しい」

菊池先輩
「つまりは、だ。お前達が実際にやることは”秘密結社の名前を広める事”と”俺の指示に従う事”だ。ここ大事な」

渉
「な、なるほど……だけどただ指示に従って動くなんて……」

菊池先輩
「なんだよ、なんか文句あるん？」

渉
「何を企んでいるんですか？　何をしようとしてるのか教えてくれても……」

菊池先輩
「俺が何をしようとしているのかわからないまま指示にしたがって動く」

菊池先輩
「秘密結社らしいだろ」

渉
「……」

記述
それもそうか……。

結衣
「あの、自分の用事などがある場合は、どうすればいいんでしょう

……」

菊池先輩
「俺の指示はお前達の生活をよくするためのもんだ。お前たちの生活に支障を与えない範囲で行うから安心していいぞ」

菊池先輩
「だがどうしても必要な指示はたとえ支障が出てもやって欲しい」

千尋
「……つまり、自分の用事よりも指示を優先させろと」

菊池先輩
「そういうことだ。俺を信じられなければやらなくても構わない。その時は俺がなんとかしよう」

千尋
「……そうですか」

菊池先輩
「まぁ安心しろって。悪い様にはしないからさ」

菊池先輩
「……秘密結社の目的に関しては以上！　質問が無いならこれからもっと具体的な話に移らせてもらうぜっ？」

菊池先輩
「さーて、今までの話をまとめればやることは二つあるわけだ。それはな～んだ？　当てるぞー。はいお前っ」

結衣
「え、え……あ、当てるんですか？」

菊池先輩
「とーぜんだ！」

渉
「えー……」

結衣
「えっと……えっと……”秘密結社の名前を広める事”と”先輩の指示に従う事”……ですか……？」

菊池先輩
「大正解。うん、飲み込みが速いな。えらいぞ」

結衣
「ど、どうも……」

結衣
「……」

結衣
「……褒められちゃいました……えへへ」

菊池先輩
「秘密結社の名前を広めることはある程度自由だ。俺から言う事以外でも自分で好きにやってくれても構わない」

菊池先輩

「大事なのは”指示に従う”という事だ」

菊池先輩
「これから指示の具体的な方法について話すぞー」

菊池先輩
「いいか、俺から出す指示の内容は”お前ら個人個人により異なる”。指示は紙に書き、”指令書”という形で個別に渡す」

菊池先輩
「この指令書は会員の中だろうが誰だろうが内容を話してはいけない。内容をメモに取ったり、そこらへんに捨てたりしてはダメだぞ？」

菊池先輩
「指令書は各自責任もって管理すること。いいな」

菊池先輩
「そして、お前らがちゃんと俺の指示に従っているかを監視するために、監視役としてこいつを用意した」

美羽
「うーす」

渉
「え……？」

美羽
「あたし、監視役だから」

渉
「えええ？」

菊池先輩
「美羽は俺の妹で、お前達の監視役として秘密結社に入る。指示に反しているようなことがあれば注意が飛ぶと思う」

菊池先輩
「あとこいつはお前らの指令書に何が書いてあるかは知っているから分からないことがあればこいつに相談しろ」

美羽
「というわけでバリバリ監視するから」

渉
「……」

美羽
「じー」

渉
「……」

美羽
「じー」

渉
「……」

千尋

「……」

結衣
「よろしくおねがいします……」

美羽
「おう、よろしく」

菊池先輩
「……以上で説明することは終わりだ。各自解らなかったところは無いな〜？　もしあればマウスホイール使って履歴を読むように」

菊池先輩
「うっし、大体の説明はこんなところかな……じゃあこれから指令書を……」

菊池先輩
「……とと、大事なことを忘れてた」

菊池先輩
「今から、秘密結社入会の儀式をする」

渉
「儀式……？　儀式なんてするんですか……？」

菊池先輩
「勿論だろ、秘密結社なんだから。儀式ぐらいしようぜ。さあお前ら、並んだ並んだ」

記述

言われるままにオレたちは教室の片隅に並ぶ。

菊池先輩
「ほらほら、間を開けずに。もっとつめてつめて」

千尋
「あの、何をするんでしょうか……儀式って……」

菊池先輩
「何のこたぁない、写真撮るだけさ」

結衣
「写真……ですか……？」

菊池先輩
「俺たちが秘密結社としてここに集まったということを記録しておくんだ」

菊池先輩
「お互いに顔も名前も知らなかった関係から、同じ志をもって集まった同士……俺たちはもう他人じゃあない……」

菊池先輩
「仲間なんだ」

渉
「……へえ」

千尋
「仲間……か」

結衣
「……なんだか、照れてきちゃいます」

美羽
「……」（コク）

菊池先輩
「みな、心に誓え」

菊池先輩
「悲しいときは共に泣き、嬉しいときは共に笑い合おう」

菊池先輩
「仲間を守るためならば、たとえ自分の命がかかっていても助け合おう」

菊池先輩
「今日このとき、俺たちは仲間だったんだという証を残す」

菊池先輩
「この先たとえ個人個人でバラバラになってしまったとしても、思い出すんだ」

菊池先輩
「俺たちは仲間だ、と」

菊池先輩
「美羽、カメラの準備はっ？」

美羽
「バッチリ！」

菊池先輩
「よし、撮るぞっ！　みんな笑えっ！」

美羽
「いっくよ〜」

記述
――――パシャ

記述
――夕暮れの教室で撮られた一枚の写真。

記述
それは、誰もまだお互いに話したこともなかった人間同士が集まった写真。

記述
いつもの生活では撮られなかったであろう一枚だった。

記述
これから、オレたちの奇妙な学園生活が始まる。

記述
漫画とかアニメとかで憧れた、キラキラして、それでいて当たり前な――。

記述

――そんな青春。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5319z/

季節外れのサンタクロース

2011年12月29日08時47分発行